325
520

始

36.1219

=1178
325-520

帝國圖書館藏

# 聖書の話

宮川巳作著

岩波書店刊行

大正
6. 7. 26
交内

# 序言

『聖書の話』の成るに及んで、之れに序言を書かうとする私は、私の地位を最もよく表すものとして、かの有名なる序文を思ひ起すのであります。曰く『我儕の中に篤く信ぜられたる事を……我儕に傳へし如く記載んと多の人々これを手に執る故に……我も原より諸の事を詳細に考究たれば次第々爲て書おくり敎られし所の確實を曉せんと欲へり』云々。私のなさんとします處は、聖書の研究のためにせられたる、最近に於ける學者の努力の結果を『次第を爲て』一ト通り讀者の爲に紹介の勞を取るに止まるので、之に私の獨創になれるものとては何も無いのであります。

聖書に對する近世の科學的研究は著しく發展して參りまして、聖書に就いての知識に大なる變化を來たし、就中從來の傳統的見解に殆ど根本的の變革を與へつ

ゝあることは、讀者の夙に知悉せらるゝ事であらうと思ひます。從つて夫れに關する著書の類も、隨分多い事であります。何も私共の樣な不文のものゝ、今更かゝる企てに關はるまでも無い事に思ひます。併し私共實際の傳道に從事いたして居りますものゝ、常に遺憾に感じて居ります事は、聖書に關する一般の知識を、一般人のために平易に書き流したものゝ甚だ尠き事であります。勿論二三のものは無い譯ではありますまいが、各々傾く處が餘りに多い樣でありまして、實際に於いては遺憾が多いのであります。夫れで私は今自ら揣らず敢へて此試みをなした譯でありますが、若し世上同感の士のために何等かの貢獻をなし得れば幸福でもあり、若し爾うでなくとも之から此上に良いものゝ築かるゝ時の捨石の一個とも なり得れば頗る仕合せだと思ふのであります。

目的が右申します樣に一般人の相手を主としたるものでありますから、之を神學の教科書として見られやうとせらるゝ方があるならば、失望せらるゝでありま



せう。併し私は聖書に關する出來るだけの良い知識を成るべく見失はない樣に心掛けた積りでありますから、或る專門家の方々に取つても、此書必ずしも少補なきにあらずと信じて居ります。而して私の態度は、時として隨分思ひきつて積極的な處もありませうけれども、併し大體に於いては至つて穩當であるものと思つて居りますから、一般の方々の聖書を研究せらるゝには、相當の便宜となるものと信じて疑はないのであります。

元來は當地にある有志の信徒のために、聖書の講義を致したのが初めであるのですが、併し夫れを平均に繼續することが出來なかつたので、全體の統一の充分でない處が多からうと思ひます。小さきながらも牧會上の多少の心配もあり、夫れに之を思ひ立つて以來、度々旅行にも出でたのであります。青島に行き南滿鐵道の沿線を巡り、亦蒙古にも參りました。元來不文な處へ持つて來て、落ち付いて之れに從事する事が出來ざりしため、處々に缺點があり勝ちであらうと恐れて

居ります。

始めから參考に供したものはドライベルの『舊約聖書緒論』モフアットの『新約聖書緒論』J.、ウォーワシャワーの『聖書とは何ぞや』等であります。

大正六年六月　　和尚山颪しの砂をあびつゝ

宮　川　生



# 聖書の話　目次


緒論—聖書研究の必要及方法……一

第一章　聖書のインスピレーションと批評……二九

第二章　聖書の構成……五四

第三章　五書……七九

第四章　舊約聖書—一、歴史……一一七

第五章　舊約聖書—二、預言……一五〇

第六章　舊約聖書—三、詩……一八一

第七章　共觀福音書……二一二

第八章　第四福音書……二七一

第九章　使徒行傳……三二六
第十章　保羅の諸書簡……三五四
第十一章　牧會的書簡と一般的書簡……三九八
第十二章　希伯來書と默示錄……四二五



# 聖書の話

宮川巳作著

## 緒論

——聖書研究の必要及方法——

聖書は今や『世界の書』となりつゝあります。此書に關する一般の知識を蓄へておくことは、何人にも必要なことであらうと思ひます。私は出來るだけ平易な言葉を以て、適當な範圍の中に、此書に關する最も善き知識を賴りとして、一般の讀者のために此『聖書の話』を述べて見ようと存じます。幸ひにも聖書はこゝ一百年程に、曾つて見ざる異常なる努力と、熱烈なる敬虔の情とを以て、頗る微細に涉りて研究せらるゝに至つたのであります。

從來聖書の研究は隨分誤つた豫想の下に取り扱はれ、從つて種々なる謬想と偏見とが並び行はれ、却つて聖書の眞義の掩はれたものが甚だ多かつたと思ひます。貴重なる聖書も永い間、かくして全く私共の前に閉ぢられてあつたのであります。夫れを私共のために開いたものは、矢張り何と言つても十六世紀の宗教改革であつたと思ひます。眞に此時以來、聖書は本當の意味に於て私共のものとなつたのであります。之れは私共の感謝致す處でありますが、併し此開かれたる聖書も、開いた心が無ければ何にもならぬのであります。聖書は夫れの書かれたる起源やら特質やら、或は亦目的や使命とする處などを能く判まへなければ、眞實の意義は分らぬものであります。たゞ漫然之れを讀んだとて、到底其眞義に徹することが出來るものでは無いのです。夫れに聖書に對しては由來種々なる誤解が抱かれて居りましたが、別けても一つの大なる誤解と言ふのは、此一般のために開放されたる聖書は、必然甚だ單純な書物であらうと見做された事であります。



聖書を教ふるに當りて、成る可く之れを單純にするのは惡いことではありますまいが、併し實際聖書はそんなに單純なものではないのです。寧ろ極めて複雜なものであるのです。夫れの眞義に達すると云ふこと、亦夫れの現はす眞理を窮めようとすることは、決して或る人々の思ふ程容易な業ではないのであります。

信仰あへあれば聖書は誰にでも容易く理解の出來るものだと、また或る人々は申します。勿論左樣に見らるゝ處もありませう。けれども實際は中々爾うはいかないのです。昔し弟子の**ピリポ**は、熱心に聖書を讀み耽つて居つた**エテオピア**の大臣に向つて、『爾その讀ひところの事を曉るや』と申したそうであります。今日でも聖書を知つて居らるゝと言ふ所謂信仰家の中、幾何か果して能く其眞義を理解して居らるゝでせうか。御互ひに能く省みなくてはならぬことゝ思ひます。

私共は眞心を以て祈らなくてはなりませんが、同時に人格と實力とを以て祈らなくてはならぬのです。其樣に私共は精神を以て聖書に親しまなくてはなりません

が、同時に理智の力を以て讀まなくてはならぬのであります。

## 一

聖書研究の必要なる事は、多言を要しない事と存じます。聖書は世界の歴史と、基督教會の歴史及び私共の宗教生活の中に、眞に重要なる地位を占めて居るものであります。神が如何に人を觀じ給ふか、人は如何に神を思想せるかを、最も美はしき言葉を以て書き現はしたもの、眞理を求むる敬虔なる靈魂の叫びの記錄であります。同時に世々の信仰厚き人の心々に、色ともなり香りともなつたものであります。亦私共を森嚴なる實在に導き、私共の心靈を燃やし、悲哀を慰め、罪惡を除き、眞の生命を私共に物語つてくれるのであります。就中私共の救主たる耶蘇基督の人格に於いて、神と人との充ち足れる啓示を與へられるのであります。人若し聖書の奥殿にいたり、其處に立ち並ぶ神と人との輝く榮光に接するときは、此書の尊さと言ふものは何の言葉を以ても現はし難きを覺ゆるのであります。ハイネが『冷たき墓』の中に、懷疑家であつた自分の上に、如何にして其大なる靈的變化が生じたるかに就いて語つたものがありますが、其一節に左の如く申して居ります。

私に救の道を示したものは夢でもなく幻でもなく、天の聲でもなく地の叫びでもなかつた。私の心眼の開かれたのは、たゞ一卷の書を讀んだ爲めである。諸君は言ふだらう『たゞ一卷の書』と。然り而かも夫れは古いもので、何人にも餘り能く知られた書である。自然其ものゝ如く平明で、且つ自然窮りなき書である。讀むに骨の折れる樣な、そんな虚飾の多い書ではない。――此書は時には單に『書』卽ち唯一の書（**バイブル**）と稱せられ、若くは聖き書と言はれて居る。神を見失つた人は、此書に於いて再び彼を見出し、絶えて彼を知らなかつた人は、此書に於いて彼の氣息に接する事が出來るであらう。

此如き人の此如き經驗は尊いものであります。そして世には此種の經驗を欲し

て、此書に來るものゝ多きは疑なき處であります。彼等は頗る靈的なる要求を抱いて、此書を探り求むるのであります。かゝる要求をもてる人々の、此書に於いて失望した例めしとては絶えてある事はありません。

併し現代の私共は、尙ほ他の要求を有つて居るのであります。そして其要求は日を逐うて熾んになりつゝある樣に見えます。此故に最近五六十年に蓄積された



る聖書研究の知識は、言はゞ殆ど革命的なものでありまして、過去千有余年の間何等の支障なくして信ぜられ、承認せられたる事柄でありましても、今は其儘にしては到底如何ともする事の出來ない程度に達しつゝあるのであります。近世科學の勃興と共に始つた衝突——たとへば或る大會がコロンブスの說とモウセの五書とは調和し難きものであるとの宣言を發したる時——亦かの禁讀書目の會がコペルニカスの天文書を『聖書に全く反したるもの』との宣告をなしたる時——亦かの宗教審判所が地動說を以て『聖書に全く反したるもの』として其異端說を廢棄するべくガリレオに迫つた時——亦敎會がダルヰンの『種の起原』を見て震駭した

る時、凡そかゝる際に起つた處の衝突は、夫れ以來近世の地質學や生物學の發達につれて、いつも甚だ鋭敏な感じを刺激されつゝ來つたのであります。そして其論爭に際しては常に次ぎの樣な三段の時期を過ぎつゝ來つたと思ひます。第一、學術上の新しき說が若し聖書の敎義と相容れない場合には、其新說をば全然不信仰なものとして排斥したるとき。第二、科學上の新說と聖書の敎義とを出來るだけ接近せしめようとして所謂辨證に努めたる時期。第三、斯かる努力を打ち棄てて、不滿足ながらも科學の智識を正理として容認するに至つたとき。此如き三時期を經驗して今日に成つたと思ふのであります。そして此種の現象は尙ほ最近に於いても、私共の記憶の中に見るを得る事だらうと思ひます。卽ち今日に於いて所謂進化說は、よし敎養あるクリスチャンの多數に依りて承認せられて居るとしても、夫れは決して聖書の敎義と甚だ善く合致して居ると見らるゝが爲めではな

くして、天地創造の由來に關しては創世記よりは『種の起源』の方が、遙かに善い説明を持つて居ると認めらるゝがためだと思ふのであります。

今日私共の此地位に達したのは、言はゞ之れ近世の賜物でありまして、確かに一の進歩と稱してよからうと思ふのです。然るに斯くして得たる新しき地位が、亦更らに新しき問題を生ずるに至つたのは、寔に止むを得ない事と言はなくてはなりません。卽ち其結果は聖書に對する傳統説は最早や正確なものと認められず、自然權威のなきものと信ぜらるゝ樣になるのでありまして、而して當然夫れに代るべき説が見出されなくてはならぬ樣になるのであります。然らば代るべき説は何でありませうか。勿論全體から言へば、敎會は未だ明白に此問題に出逢つては居らぬらしいのであります。併し最早や其時は近づきつゝあると申してよからうと思ひます。多くの人々は次第に、聖書の敎ふる處と世間の知識の示す處とは、相矛盾撞着しつゝありと警戒せるかの如くに見ゆるのであります。そして其



結果として往々傷ましき混雜と悲劇とが、到る處に現出されんとして居ることは疑なき事實と思ひます。昔はかゝる場合にも聖書は正しとせられて、どうにか落ち付く處に落ち付いたものでありましたが、今となつては中々爾うはいかぬのであります。恰度日曜學校の生徒でも、始めは聖書の物語りを其儘に信ずるのでありますが、次第に學問の程度の進むに從つて、種々なる疑惑を生ずる樣になるのと同じであります。魚が生きながらのヨブを呑み込んだと言ふ事、或る人の命令で日と月とが同時に中天に懸つて居つたと言ふ事、驢馬が人語を發したと言ふこと、水中に斧の頭が浮び出でたと言ふ樣なこと——此等は果して眞實あつた事でありませうか。恐くは今日では曾つて之れを信じた人も、極端を出でゝ極端に行き、遂に全く聖書の物語りを信ずる事が出來なくなつた人も多からうと存じます。敎會が今尙ほ此等の物語りを眞實なものとして、人を敎へなければならぬものとしたならば、日ならずして其門前は雀羅を張るの處となるであらうと思ひま

す。

故に今日の私共は聖書を愛讀すると言ふの外に、更らに特別なる研究の必要に迫られつゝあるのであります。理智と敬虔とを兼ねて進み、以前よりは一層打開いて、自由なる心を以て、頗る根本的な研究を遂げなくてはならぬと思ふのであります。私共は可成く聖書に關する過去の學說を差し措いて、たゞ眞理を探求せんとの單純なる希望を主として、聖書に向はなくてはならぬと思ひます。また私共は之れを爲すには、今や頗る便利な地位におかれてあるのです。私共には信ずべきものと信ずべからざるものとは、明かに示さるゝ事を得るのであります。私共は何等の束縛も先入主もなしに、直ちに聖書に對する事が出來るのであります。而已ならず私共は永い間積み重ねられたる聖書の知識の藏に入り、欲する處の善き寶を自由に取り出し得るの權利を有つて居るのであります。私共は砂礫を篩ひて黃金を取り、一時的なるものから永久的のものを見出すことを得るのであ



ります。私共はたとへ聖書の記事であるにもせよ、誤りは誤りとし、矛盾は矛盾として承認すべく、之れを拘束せらるべき何等の約束をも有つて居らないのであります。私共は基督に依りて敎へられし愛と恩惠の神は、民數紀略に錄さるゝが如き、惡事と虐殺とをイスラエル人に命じ給ふことは無いであらうと斷言したからとて、毫も差支を生ずる事はないのであります。省察を尊ぶ人の心は、聖書自身の中にも進化の道程の行はれつゝあることを見るを得ると思ふのです。私共の斯く申しまするを、危險視する人々もあるでありませう。私共は夫等の人々の立場に對しても同情を有することが出來るのであります。乍併眞理は私共の達すべき最後の港でありますから、其處に落ち付くまでは萬難を排しなくてはならぬと思ひます。古きを尊ぶと同時に、新しきを取るべきを斷じて恐れてはならぬと思ひます。眞に價値あるものは、どんな方法を以てしても、決して永久に失はるべき恐れのないものでありますから、私共は之れを忘れずに、清き精神を以て進ん

で行きますならば、遂には聖書を眞に私共のものとすることが出來やうと思ひます。斯く申しましても私共の前途には、曾つて思はざりし困難の横つて居るであらうことは、言ふまでもない事であります。そして其中には解決の付くべきものもありませうが、或は付くことの出來ないものも無いとは限りません。私共は無論其處に警戒を加へて進むの要はあります。幸ひにして悉く明解する事が出來ますれば、夫れこそ私共は一層衷心からの歡喜を以て、聖書の與ふる不朽の生命を享樂する事が出來るようになるのであります。要するに私共はモー一層智的に聖書を愛する樣になつて、モー一層よく聖書を愛するを得るに至ると思ふのであります。



## 二

聖書研究の必要——モット智的に——を陳ぶることを此邊に止めて、私は今から少しく其方法の事に移つて行きたいと思ひます。聖書は之れを秩序なく讀むときは、害があつても益は無いものと申してよろしからうと思ひます。取り分け其方法を誤るときは、甚だしき弊害を殘すのであります。聖書を讀むの素養を缺きたる人々が、たゞ雜然之れを漫讀し、或は單なる直覺に賴つて、たとへば歷代史略をも福音書と同樣の靈潮を有するものとして讀んだからとて、其靈性を養ふべき多くの利益を受くることが出來るものではないのです。況んや研究の方法よろしきを得なければ、更らに一層の弊害に陷りて、遂には聖書を厭ふようにもなるのです。單に聖書の研究と申しても、私共は余程其道を撰ばなくてならぬのです。徒らに章を別ち節を剖きて、文字の解釋に衒學的な仕方をしたからとて、聖書研究の眞の目的は達せらるゝものでは無いのです。

聖書研究のために必要な條件として、私の擧げたく思ふ第一の點は、此書を普通の書物と同樣にして讀むことであります。無論聖書には、普通の書物と違つ

た處は澤山にあります。併し其違つた點の見出さるゝのは、違つた處の無いものとして見た結果から出て來るのであります。初めから違つたものして見ることは、却つて聖書の眞を見失ふに至る基であります。同じものと見つゝ、同じくないことを發見するに至るのが、最も健全な順序だと思ふのです。今の人は初めから基督を神と見て研究を致す樣でありますが、昔は弟子たちはたゞ人として彼に從つて居つて、終りに『我が神、我が主』と申すに至つた樣であります。之れが至當の順である樣に見ます。同じ樣な事を妙にひねつて申す樣に聞えるかも知れませんが、其處が所謂方法と言ふ問題の起る處であるのであります。一寸見ては同樣に見ゆる事でありましても、此方法の誤りは千里の差を生ずるのであります。本來私共が聖書を讀む時に、其聖書の記事自身の元來の意義が何であつたかを知るのが極めて大切な事であるのであります。夫れを致しますのには、之れを私共は他の書に對すると同樣な心持ちを以て、何等の偏見も先入主もなしに

惱みを同じくし、慨ぶを同じく持もし人として。

イエス樣の境遇と己れ人の現在の境遇をくらべ見て、

イエス樣の心と現在の自己の心とくらべ見て。



讀まなくてはならぬのであります。何かの說や意見に囚はれて居るのは、最も禁物であります。聖書にはたゞ一つの意義が存するのみであります。夫れを語り若くは書きたる預言者や福音書の記者等が、最初夫れを受けたる聽衆若くは讀者に與へ得たるまゝの意義其物であります。其外にどんな意義があらうとも、夫れは言はゞ今日讀む私共の勝手であります。感ずる人は感じ、靈魂の糧を得る人は得ても固より差支のないことであります。併し何よりも先きに、本來の意義其物を見出すのが最も肝要な事であり、聖書を讀む人の第一義とすべきであるのです。かくして讀む時に、聖書の一言一句から何等の教訓を得ない場合もあるかも知れませぬけれども、夫れは致し方も無い事であります。之れに反して若し聖書の各々の文が神秘であり、各々の句が謎であり、各々の文字が記號であると申したからとて、夫れで聖書の價値を寸毫たりとも增し得たものとは、私共はどうしても思ふ事が出來ぬものであります。聖書をこんな風に讀まうとするのは、全然異敎

的であり、ラビの亞流を學ぶに過きぬ事でありまして、私共の取らぬ處であります。

此邊に聖書研究の要諦があると私共は思ふて居ります。別けても他の書物と同様に讀むと言ふことは、甚だ大切な點であります。聖書を書く人は普通書物を著作する人と同様に、ある一ヶの明白なる目的を有して居つたのであります。そして其を隱す處なく讀者に知らしめんとの希望を有して居つたのであります。(と言つて一二の例外もあります。但以理書と默示錄の如きであります。)彼等は全く言はんと欲する事を言ひ、言うたる事は言うた通りの事であつたのであります。故に私共に第一に取るべき道は、聖書が知らしめんと欲したる明白なる意義を見出す事であります。私共は古來行はれ來りたる一種の聖書解釋の法に、最早や別れを告げなくてはならぬのです。例へば舊約聖書を以て何やら新約聖書の豫表でもあるかの様に言ひ、舊約聖書にあるものは何でも基督に關する預言の類かの



様に、論じ去る人は頗る多かつたのであります。亦或る論者は、聖書のどの節からでもどんな意味でも抽き出すことが出來る様に申したものであります。昔しフイローンは、アブラハムがハランを後にして立ち出でたとの物語(創十二〇)を解釋して、よし正史で無いまでも『感覺の生活を見棄てた』教訓を與ふるためのものであつたと見て、實に尊い記事だと申したのであります。實際左様に言へぬ事もなからうと思ひますが、實は全く不都合な解釋だと私共は存じます。或は又ハガルを以てアラビヤのシナイ山、若くはパレスチナのエルサレムを表はしたものであるなぞと論じたものもあつた様でありますが、こんな解釋をしたら蓋し際限の無い事だと思ひます。

私共は全く他の書物と同様に、聖書を解するの途を取らなくてはならぬのであります。之れに由りて私共は聖書解釋の前に横はる荊棘を拓いて、坦々たる大道に出づる事が出來るものと思ひます。聖書は固より單純なる書物ではありません。

併し之れを解するの道を得さへすれば、頗る單純なものとなるのであります。所謂聖書研究の必要と言ふのは、此單純なる道に出づるの所以であります。

以上は大體の方針を述べたまでゝあります。然らば如何にして聖書の眞義を知らんと欲する、私共の目的を達することが出來ませうか。左に少しく述べて見ようと存じます。

一　私共は第一に出來るだけ正確なる原文を賴りとしなくてはなりません。左もなければ出來るだけ正確なる譯文を得ることに、努めなくてはなりません。之れは聖書を尊ぶ人々の特に注意して、力を用ゐなくてはならぬ點であります。私共がダンテなりプラトーンなり、或はトルストイなりを讀まうとするならば、原文に依るのが一番よいのですが、夫れが出來ぬとならば、最も信用するに足るべき譯本を得るのに苦心致すのであります。世に聖書を神の言と信ずる人々の間に、此點に就いて聊かの注意も拂はれてないのは、實に不思議にも甚だ悲しむべきことで



あるのです。單に英譯に付いて申して見ましても、一六一一年に出でたる欽定譯よりは、一八八一年から一八八六年に渉つて出來た改正譯の方が、遙かに優れた點の多い事すら、考へて居られぬ人が甚だ多い樣であるのは、遺憾な事であります。

私は夫れに就いて二三の事實を語つて見たいのです。（一）欽定英譯の出來ます頃には、其譯者等は、未だ最も古い原文の或るものを所有して居らなかつたのであります。卽ち新約聖書の方ではシナイ古典と及びヴアテカン古典と言ふものは、未だ彼等の知らなかつたものであるのです。改譯者の申した樣に『一六一一年の出版は後世の抄本に據つたもので、亦其抄本の數も少なく、而かも批評的技能の充分でなかつたもの』に其典據を置いたものであつたのです。然るに現今の私共は、其三世紀前にあつたものよりは、遙かに正確な原本の幾つかを所有して居るのであります。其結果として、かの改正譯の譯者等が『なるべく不必要な變更は敢へ

てしない』との豫定の下に其改譯の事業を進めたに拘はらず、尙ほ新約聖書に於いて、改正譯は欽定譯よりは、凡そ三萬六千有餘の異りたる飜譯の箇所を有して居るのに見ても、一斑を知ることが出來ると思ふのです。斯く申して私は何も改正譯が一概に善いとの議論をなすのではないのです。たゞ如何に聖書の譯文に對して私共の注意を用ゐなくてはならぬかを、讀者の知らんことを欲するまでの事であります。今私の思ひ浮んだ手近い二三の例を擧げて見ませう。馬可傳の終の十二節は（十六〇九—廿）改正譯では別文に置かれてありますが、之れは最古の希臘原本には無いからであります。（一說に由れば、之れは小亞細亞の長老**アリストン**と言ふものゝ加筆だつたと申されます。）夫れから又人の能く知るかの姦淫を行へる婦人の物語りは（約七〇五十三—八〇十一）改正譯では括弧の中に錄さるゝことゝなつて居ります。古い原本の多數に無いものであるからであります。亦約翰第一書五章八節に記さるゝ三つの證者の有名なる記事は、除かるゝ事になつ



て居ります。そして之れは後に挿入されたる僞文であらうと一般に認められて居ります。亦提後三〇十六の『聖書は皆神の默示にして』とありますのは『神より示されし聖書を皆』と言ふ樣に改譯されてあります。之れなどは言語の相異は僅かなものでありますけれども、其の意義の相異は決して僅かなものではないのです。此等は眞に二三の例に過ぎないのですが夫れでもなほ『どうでも善い』と言はるゝ人があるならば、夫れは如何なる眞理に對してもどうでも善い人でありませう。

（二）外形上の排列に於いても、改正譯は更に大に改良を加へて居ります。夫れは散文は卽ち散文體となり、詩歌は卽ち詩歌の體に改められたのであります。此等は些細な事の樣でありますが、實は聖書の忠實なる讀者に取りては、極めて大切なる事柄であるのです。私共が歷史の物語りを讀むのに、詩歌の調子では善くないのです。靈性向上のためのものとしては、散文體は夫れを現すべく適當なものではありますまい。其如く文體が、各々夫れに適したる性質を備へて居ると

言ふ事は、甚だ肝要な事に屬するのです。（三）改正英譯は亦、聖書の章節の區分と年代の書き入れとを全然抹殺し去つたのであります。而して之れは改正譯の大なる功蹟の一つと見做さるべきものと思ひます。欽定譯では何等か據り處があつて爲した事であるには違ひありますまいけれども、實は夫れのあるがために幾多の弊害を殘した事は掩ひ難き事實であります。聖書に章や節の分ちがありますために、本文の前後の關係を不明ならしめ、自然其眞意を誤る場合も珍らしくないのであります。十七世紀の神學者等にして之れがために誤らしめられたる例は、非常に多いのであります。以賽亞書六十章一―三に於て『基督の職責』を論じたのや、雅歌を以て『基督に對する敎會の愛を歌ふたものである』となしたるなど、皆此章の區分に囚はれたる誤解であつたのであります。亦欽定譯の欄外に書き入れたる聖書の年代は、亦屢々益なき論爭を導く基となつたものであります。此年表に依れば、世界は紀元前四千〇〇四年に創造されたものであり、ヨセ



フの父がヨセフのために綵れる衣を造つて彼に與へたのは、紀元前千七百廿九年の事であつたとなるのであります。然るに改正英譯は總て此等を取り去つて、聖書の本文自身をして語らしむる事に改めたのであります。之れは實に賀すべき英斷であつたと思ふのであります。

此如く述べて私共は必ずしも改正英譯を完全なものとなし、出來得べき最上のものであると言ふのではないのであります。たゞ聖書の眞意を讀むために、夫れの飜譯文に注意しなくてはならぬこと、及び出來るだけ完全に近いものを得るに努むること、同時になるべく各種類のものを多く參考しなくてはならぬとの意味を、繰り返へしたに過きぬのであります。

二　『他の書物と同樣に解する』には、他の書物と同樣に『讀まなくてはならぬ』のであります。若し私共が聖書の或る書を良く理解しやうとするならば、夫れを連續的に、必ず全篇を通讀することを忘れてはならぬのであります。若し亦或る一

部の意味を知らうと欲するならば、少くとも其前後の數節を照し合せて其含蓄を充分質し、自明の理とも見らるべきものを得るまで詮索しなくてはならぬのであります。前後の關係に頓着なしに、たゞ一節か一節の半ばを取り出して、之れに自己一流の解釋を下す事は世に能くあることでありますが、頗る間違つた事であります。一例を擧げて見ますると、以賽亞書七章であります。之れを私共が全體として讀むならば、全く其當時の事を記したに外ならぬものであります。然るに世の人々は往々にして其中の一節を取り出し、之れを基督降誕に關する預言であると言ふ風に解釋するのであります。

三　此事に依りて思ひ出さるゝは、私共が他の書を讀む時には、其著作の時代に一應注意を致すのであります。私共が**テニスン**にせよ**ミルトン**にせよ、夫れを讀むには著作の時代を考へずに居る譯に行かぬのであります。時代を解せずして思想を解し樣と言ふのは、殆んど不可能な場合が多いのです。聖書でありましても、



此點は全く同じであります。聖書は勿論『凡ゆる時代のため』のものであります。併し同時に亦『或る時代のため』に出來たものとも言へるのであります。聖書の各部分は皆相應に時代の特色を帶びたものであります。のみならず聖書は長い世紀の間の作物を蒐めたものでありますから、一々其時代々々の思潮を反射して居るのであります。夫れ〳〵固有の歷史的背景を有して居るのですから、私共は夫れを忘れない樣にして聖書に對するのが肝要であります。そして聖書解釋の困難が多く除かるゝことが出來ます。聖書を神的のものとしてのみ考ふる處から生ずる幾多の困難が、之れに依りて解決の途を見出すのであります。亦私共は天啓の進歩的性質を知るによりて、聖書の解釋の上に尠なからぬ光明を得るのであります。此如き歷史的研究の方法に據りて、聖書の事實は遠近の色どり頗る鮮やかなるものとなるのであります。

四　著作の時代を思ふのみならず、其作物の文學上の性質を知ることも、亦必

要なる條件であります。申すまでもなく私共の聖書は、文學上種々なる種類のものを含有して居るのであります。歴史、哲學、傳記、民俗集、律法、詩歌、預言、格言集、小說、脚本、神學、尺牘、幻覺、點示など、殆んど凡ゆる種類のものを集めて居るのであります。故に私共は此等のものを、一と通り見分けてかゝる事が必要であります。私共は詩歌を散文の積りで讀んではならぬのであります。哲學を律法の樣に、幻覺を歴史の樣に讀むべきでは無いのであります。一體聖書は此點に於て凡ゆる人の愛讀書たるを得る所以になつて居るのであります。聖書はたゞ神の求め給ふ處をのみ記したものではないのです。人の求むるものが遺憾なく充たさるゝのであります。人生其物の如くに變化に富みたる其內容は、各種の階級の人の感興を惹くに足るものであります。然るに由來器械的なる聖書の說は、此書をば至極平板なるものとなして仕舞つて、全く趣味も變化もなき、同色同型のものと化了したのであります。若し私共がカアライルの『永刼の然諾』と、



マカウレーの『ポープの人間論』と、ブラツクストーンの『註解』と、クウパーの讃美歌、シエレーの短文などを一冊に集めて、之れを一樣に讀破し、一樣に批評し去らんとしたならば、如何に奇異なる結果を現はすでありませうか。而かも或る人々の聖書に對するは、正さに此方法であるのです。聖書の意味の分からぬのも無理の無い事です。

私共は聖書は打ち開いたる眼と怖れなき知識とを以て接する時にのみ、始めて其偉大なる全き雄姿を仰ぎ見ることの出來るものだと思ひますので、以上申す樣な事をも申して憚らないのであります。宗教にありては、探究を懼るゝは誤謬の始めであります。從來の說の足らない處を見出さんとの努力を恐るゝのは、決して健全なる信仰ではありません。寧ろ非常なる懷疑的態度と言はなくてはならぬのです。夫れは眞理に忠信なる精神の無い事を、表白するものと申して差支へなからふと思ふからです。人に與へられたる天の啓示としての聖書の尊き價値は、

著者や時代に關する結論がどうならうとも、或は歴史的研究や科學的批評が如何になり行かうとも、夫れに依りて毫末も左右せらるゝものでは無いのです。たゞ近世の批評と探求とによりて、聖書から取り去らるべきものゝ取り去らるゝのは、取り去られざるものゝ殘らんがためであります。聖書は私共の臆病によりて保護せられ、亦生存して行くものでは無いのです。眞理に逆つてなすのでなく、眞理のためになすのであるならば、私共は勇氣を以て爲すべきだと思ひます。



# 第一章　聖書のインスピレーションと批評

聖書は全部同じ性質の文書から成れる單なる書物で無いとは、私の既に述べておいた事でありますが、果して爾うだとすると、私共に取つて次ぎ〳〵にいろ〳〵な疑問が湧き來るのであります。即ち此等種々なる、そして互ひに相異なれる雜多なる文書が、如何にして一の神聖なる書として認められるゝに至つたのでありませうか。亦如何なる方法と手續とによつて、現今の如くに一括せらゝに至つたのであります。抑も此等の文書が、他の總ての文學上の産物と全く異つたものであると信ぜらるゝには、共處に如何なる權威が存するのでありませうか。凡そ此種の疑問が、續々近代的の人の心に生じ來るのは、眞に止むを得ない事だと思ふのです。全く必然的の事であるのです。何故となれば、所謂神聖と稱せらるゝ文書は世界何れの地にも見出されるのであり、而して古今を通じての現象であるこ

とが、愈々明白になつて來て居るからであります。クリスチャンが聖書を尊崇する如く波羅門の徒は吠陀を尊崇し、佛教の徒は三部經を、波斯教の徒はゼンド、アベスタを、東洋の人々は孔孟の書を世にまたなきものとして尊んで居るのであります。其尊崇の度合にも、大した違ひの無い事が知られて居るのであります。私は勿論此處で、私共の聖書と此等のものとの比較の論をするのが目的ではありません。たゞ此等の書を重んずる人々から見れば、此等も矢張り一種のインスピレーションに依つたものであり、超自然的に缺點なきものとして取扱はれ、亦事實に於いて神との交通を望める人の心に、神の證據を示し得たるものゝ樣に思はれるのであります。果して然りとすれば、私共は先づ私共の聖書を筆頭として、總て此種の神聖なる文學書類は、本來如何なる經路を辿つて世に現るゝに至つたものでありませうか、夫れを先づ考究して見なくてはならぬのであります。

其經路には恐らく二タ通りあつたと思はれます。卽ち或る種族の傳說なり律法



なりの樣なものが、始は口傳に依りて傳はり、遂には書となり、夫れに歷史とか習慣とかゞ加はり、亦信仰的のものなどが次第に增して、恰かも石に苔の付く樣に出來上つたもの、言はゞ吠陀、及び多少異つては居りますが、私共の舊約聖書の如きが夫れであつたらうと思ふのです。モーゼは或る偉大なる人格、たとへば宗教の開祖などから生れ出でたるもの、勿論其中には自ら筆を執つたものもあり、或は弟子等の記錄したものもありましたらう。何にもせよ世に數ある聖典の多くは、此中何れかの方法に因つて、現に世に傳來するに至つたものと思ふのであります。

併し此如くして出來上りたも聖典も、初めから神聖なもの、若くは超自然的なる權威を有するものと稱せられたのではないのであります。多くは皆後世に至つて、爾う認められたのであります。靈の潤ひの豐かなる時代にあつては、人は人の手で書かれたものを重んずることが、至つて尠ないのであります。彼等は獨り靈

の空氣にひたされ、覺へず其香りに醉はされて滿足して居るのであります。**イスラエル**で言へば預言者等の簇出したる時代が、卽ち夫れであつたであります。然るに世は何時しかに靈的の消息其迹を絕ち、預言的使命の聲いと微かになり、人は皆過去を思ふ樣になつて、初めて古典の類が熾んに持て囃さるゝに至るのであります。人の心の裡に靈感絕えて、漸く外部的なる權威を慕ふに至り、彼等を濟ぐべく謬りなき古聖の記錄なぞを要求するに至るのであります。

かくて大なる文學は其偶像となり、種々なる方法を以て其超自然的完全が主張せらるゝに至るのであります。卽ち奇しげなる物語りも史實と變じ、天地創造の假設が、いつしか科學的に眞實なるものと證せられ、不完全なる倫理すらも最も優れたるものと見做され、種々なる矛盾も、極めて不自然なる方法を以て調和を圖らるゝに至るのであります。かの偉大なる**ウエスレー**すらも此記錄の偶像禮拜者となりて、出埃及記廿二〇十八節に『魔術をつかふ女を生かしおく可からず』



とあるを見ては、『余は此等の魔術者を憐れむことをせぬであらう……余は彼等を總て焚殺するを辭せぬであらう』との傍註を書き付くるに至つたのであります。**デイン**、**バアゴーン**が聖書に關して書きたるものに『聖書の各書——各章——各節——各語——各音——各文句——皆悉く至上者の直話である。聖書は直ちに神の言に外ならぬ。何れの部分が多い、何れの部分が少ないと言はず、總ては皆同一に……絕對に誤謬もなく……』云々と申してあります。

人の心裡には斯かる**トグマ**をすらも、何等の確證のなきに信じ得る能力があるものと見えます。併し私共から見ますれば、聖書に對する此樣な信仰は、聖書自らが要求しないものを、恣まゝに聖書のために要求せんと欲するものでありまして、心ある人をして宗教に對しては却つて懷疑の念を深からしむるに過ぎないものと思ふのであります。聖書を極端に崇拜することは、決して耶蘇基督の精神では無かつたのです。彼は聖書の文學よりは、精神を尊重されたのであります。夫

れは私共が彼がモオセの律書に對する態度に見て、知る事が出來るのであります。（太五〇廿一、廿七、卅三、卅八、四十三）紀元三世頃のオリゲンの如きでも次の樣に申して居ります。『日も月も星も無いのに、誰が一日とか二日とか、朝とか夕とか言ふことを考へ得たらうか。誰か神を橐駝師かなぞの樣に、エデンの園に植樹を爲し給うたと眞面目に考へることが出來やうか。或は吾々の肉眼で見たり感じたりすることの出來る樣な、生命の樹があかれてあつたとか、或は夫れを吾等の此肉の齒牙で嚙むならば生命を得べしなど言ふ話を、誰が其儘で信じやうと言ふのだらう。或は更に亦、其樹の實を食つて人が善となり惡となると言ふ樣な事を、誰が受け容るゝことが出來ませうか……有りもしないことを實際あつたかの樣に書き記したる多くの此種の實例を、モット澤山擧げると言ふとは、盲目で無い人々のためには、最早や餘り必要の無い事であるだらう』云々。

聖書の無誤謬と言ふ樣な事は、基督教會にありては、決して權威のある說では



ないのです。昔ある時代、或る人々の間には、左樣な說も行はれたものであります。併し今日の進步したる世の中には、全く無用な教說であります。また事實として承認いたして居るものであります。今の世に如何なる人でありましても、創世記の初に記さるゝ天地創造の記事を、近世の地質學や生理學の知識と、兩立するものと思ふことが出來ませうか。亦創世記六章十九節から七章二節までの記事を讀んで、誰か其數に就いて疑問を抱かずに止む事が出來ませうか。亦路加傳に記さるゝ戶籍調べが（二〇一—五）事實に於いて『世界中』に行はれたものと、誰が信ずることが出來ませうか。（那譯には『天下』とありますが原語では『總ての世界』とでも言ふべきものであります）或は亦申命記廿一章十八節から廿一節までに記さるゝ如き事が、全然實行されたものだと私共は信ずべきでありませうか。神が亦誠に此如き實行を御命じになつたものと、私共は思ふべきでありませうか。私共は勿

論現代の進みたる道德觀を以て太古の記錄類を批判することの、決して正當で無いことは知つて居ります。たゞ私共は此如き記錄をさへ絕對に完全なものであり、千古に人の賴るべき規矩でありとする敎說に從つて、聖書を讀まなくてはならぬと言ふ謬想を、排斥し去らうとするのであります。少くとも記錄のかゝる部分までが、神に**インスパイヤ**されて成つたものであると言ふ事を承認すべきであらうかどうかを疑ふのであります。

## 二

聖書無誤謬說に斯く反對し得たからとて、私共は夫れで何にもかも氷解したと言ふ譯では無論ないのです。寧ろ却つて多くの疑惑を出す樣になつたのであるかも知れぬのです。若し聖書は果して神の靈に導かれて出來たものだとすれば、以上に私が述べた樣な實例は如何にして有り得る事であるのでせうか。亦若し夫等に人間的の誤解若くは誤謬の要素が混入して居ると言ふことを容認すべきものなら



ば、如何にして聖書を全體として神に**インスパイヤ**されたる書と言ふことが出來ませうか。私共はかゝる書をしも、猶ほ人生の誤りなき指導者と認め得べきでありませうか。凡そ此種の疑問が、續々として生ずる事であらうと思ひます。而して遂に私共の執るべき途は、聖書をたゞ其儘にして受くるか、或は全然受くべからざるものとすべきかと言ふに歸すると思ひます。何となれば聖書に若し**インスピレーション**があつたとすれば、夫れは各章各節に於いて一樣にあつたものと見なくてはならず、若し亦爾うでないとすれば、私共は何によりて其程度を知ることが出來ませうか。ですから結局全部を承認するか、しないかと言ふことに歸着するの外はあるまいと思ふのであります。私共はかの歷史的物語なぞの一伍十什が悉く正確なものではないとする樣な、そんな**インスピレーション**のあるべしとは信ずるを得ないものであります。私共に取つては**インスパイヤ**されたる部分と、然らざる部分とを判別すべき、確かな標準が無いのであります。私共は

如何にして此困難を調和せしむることが山來ませうか。

一　本來基督教會のためには、**インスピレーション**など云ふ言葉を、餘り氣六ケしく定義しない方が善かつたと思ふのであります。然るに之れをなさんと欲して、古來教會は異常な知識を示したのであります。けれども世には論理の方法のみで、行き得ないものが多くあるのであります。論ずるよりは、感じなくてはならぬものがあるのです。**インスピレーション**とは其言葉の如く、全く靈的事物に屬するものであります。故に靈的に考へなくてはならぬ事柄に屬して居るのであります。若し聖書が全體一樣に**インスパイヤ**されたものだと言ふならば――たとへば出世〇卅四―卅八の記事も約三〇十六と同樣に――斯く考へる人があるならば、私共は其人の靈的素養の資格を疑はざるを得ないのであります。美、善、崇高なぞ、此等は到底定義し得べからざるもので、**インスピレーション**の如きも理論とか定義とか言ふ範疇に入るべきものでは無いのです。



二　然り而して**インスピレーション**の第一義は、之れは本來人格に對して生ずるものであつて、書物などに對して言ふのは、夫れの第二義の事でなくてはならぬのです。たゞ生ける靈のみが**インスパイヤ**さるゝもので、必竟人格が人格に接觸する時に作用する、其靈的閃光であるのであります。靈のみ靈に作用し、人の靈性のみが神を呼吸し得るのであります。**インスピレーション**とは夫れを受くべき準備ある人の靈性の上に作用する、神の直接なる働きでありまして、其働かれたる靈を通して神の眞理が他に傳へらるゝのであります。ですから其働きは直覺的であつて、苦心の結果として會得せらるゝ樣なものでは無いのです。上より來る直接の働き、亦賜物であります。故に時としては全く價値なき人の上にも此働きが降るのであります。**イザヤ**が幻に見たる、かの祭壇よりの熱炭が彼の唇に觸れ、其罪潔められたりとの意味は、之れであつたと思ひます。**インスピレーション**は天よりの上使であります。倫言汗の如し、其降下せらるゝに於いては人

はたゞ從順なるの外は無いのであります。

三　併しながら**インスピレーション**と夫れの所有とは、全く別の問題であります。**インスピレーション**は、人の本來持つて居る才能を強くし健やかにするものではありますが、夫れに取つて代はるものではないのです。聖書の場合で言ふならば、夫れは**インスパイヤ**されたる個性の事業であつて、他から動かされて其儘に働く、所謂自働器械的の產物では無いのであります。自ら意識しない事に使はるゝ、單なる媒介者とは違ふのであります。心を用ゐず、たゞ手のみにてなし得る、一種の交通機關の如きでは無いのであります。**インスピレーション**は口授では無いのであります。

そこで以上に述べたる處を直接私共の問題に當嵌めて考へて見ますると、夫れは以下の如き問題になると思ふのです。（一）神の**インスピレーション**を受けたる人の書き物に缺點のあると言ふのは、どういふ譯であるだらうか。（二）聖書に於



いて所謂**インスパイヤ**されたる部分と然らざる部分とを、何によりて判別する事が出來やうか。

此第一の問題に就いては、神の**インスピレーション**の働きは、どう言ふ方面に主として働くものであらうかを知れば、自然と分かる事であります。そして申すまでもなく、神の人を**インスパイヤ**せらるゝのは、主として宗教的の方面であるのであります。神は私共に宗教上の眞理に就いて明確なる知識を得させ、自らの意志と自的とに關する純粹なる理解を得せしめんとせらるゝのであります。故に此如き靈の直覺には、今の世で言ふ科學の知識や、歷史的事實の報導が嚴正でなければならぬと言ふ樣な事は無いのであります。たとへば聖書の記者が、天文學や地質學の事に就いて極めて誤りたる知識をもつて居つたとしても、若しも神に關する事柄に於いてだに眞實なる觀念を有して居つたとすれば、其人の**インスパイヤ**されたりとの事實には、何等の差支へは無い筈であります。勿論之は頗る明白單

純な議論に過ぎませんけれども、併し之に由りて私共は聖書のインスピレーションに關する種々なる問題を、容易く解決する事が出來ると思ふのです。聖書は決して學術を教授する書物ではありません。亦歴史の教科書でも無いのであります。其唯一の目的は、宗教上の權威たる事にあるのであります。インスピレーションは必竟靈に屬することであります。

たゞ之れのみではなくて私共は聖書の中にある宗教上の教訓にさへも、インスピレーションの度合ひを認めなくてはならぬものであります。同時に私共はまた、天啓なるものは、人の夫れを受くるに適したる比例に準じて次第に進み行くものであることを知らなくてはならぬと思ひます。例へば聖書の始めの部分に顯はるゝ神に關する思想は、尙ほ極めて低級なものであることは、何人にも明かな事だと思ひます。舊約聖書が神を王と觀念したるは、新約聖書が父と觀念したるに比して低きものなることは、多言を要しない事と思ふのです。併し聖書を通じて驚く



べく亦注意すべきは、總ての思想及び事實が、斷へず健全なる方向に上進し來つた事であり、且つ完きものゝ來る時に完からざるものが次第に消え去りつゝある事であります。

第二の問題――聖書のインスパイやされたる部分と然らざる部分とを、私共は之を如何にして判別すべきかと言ふに、先づかゝる疑問を有する人には、一種の懷疑的前提が付きまとつて居つて、夫れが往々累をなして居るのを見るのであります。卽ちチヤルマースの言つた樣に、此人々は『宗教上の眞理に達するのは難いものだ』と申すのでありまして、つまり彼等は宗教上の眞理と言ふものには、分らぬ部分があるものだと始めから定めて掛かるのであります。併し無論之れは誤つて居るのであります。爾う思ふ處に幾分の眞理が無いとは言へませんけれども、同時に私共は『人の中に靈あり、彼に理解を與ふる大能者の氣息がある』と言ふ、雄大なる一事實を認めなくてはならぬのであります。言ひ換ふれば人の中には殆

んど本能的に、神に應答し得る神の如き靈能、神の與へ給ひし能力があるのであります。私共が之れに賴つて行くならば、聖書の著者の事、また著作の事實などに就いて、外部的にはよしや多くの不明な點があるにもせよ、信仰と道德の領分に於いては、此書に依りて誤りなく導かれて行くことが出來るのであります。私共に取りて聖書の**インスピレーション**を驗すべき、最も有效なる一つの試金石があります。夫れは即ち此書が眞に、之れを讀む者を**インスパイヤ**するかどうかと言ふ事であります。試みに帳書と哥前十三〇と、代上一〇と詩廿三〇と、出廿六〇と約十四〇とを比べて讀むならば、其何れが果して最も强く私共を**インスパイヤ**するでありませうか。從つて何れが眞に**インスパイヤ**された神の聖言であらふかは、之れを判別するに決して困難なもので無いことは明かだと思ふのであります。私共の希望を燃し、私共の奮鬪を助け、私共の罪を責め、私共の悲哀を慰め、神に往く道を私共に示すもの——夫れぞ眞に**インスパイヤ**された聖言、



若しくは書と稱すべきでありませう。而して私共が聖書を以て**インスパイヤ**されたる書であるとなすのは、聖書の中にかゝる尊き要素が夥しく存するからの事に外ならぬのであります。夫れは恰かも石英、硅土、石灰などの含まれ居るに拘らず、金の多量を有するが故に金鑛と稱すると同じ道理であります。人間の**アスピレーション**は、神の**インスピレーション**に對する善き應答であり、また其最も善き試金石であります。聖書を讀んで私共の靈魂が**アスパイヤ**することが無ければ、夫れには**インスピレーション**が無いものと斷じて差支へありますまいと思ふのです。若し眞に**インスピレーション**があるものならば、夫れを讀む私共は確かに**アスパイヤ**さるゝ筈だと思ふのであります。

## 三

聖書の批評的研究と言ふものを大層恐れ、また厭ふ人のありますのは、主として此**インスピレーション**の眞義を誤解する處からである樣に見えます。然るに私

共の後章に至りて論じまする處は、すべて此批評的見地からするのでありますから、今に於いて其事を少しく論じておく必要がある樣に思ふのであります。聖書の批評と云ふことは、聖書無誤謬說を奉ずる人々の無論同意し難き處であらうと言ふ事は、私共も能く知つて居るのであります。彼等は聖書をば理性の關門に依りて通過せしむるは、神を瀆がすものとなして居るのであります。彼等は聖書批評と云ふ聲を聞くだにも、恐るべきこととなして居るらしいのであります。彼等は聖書の批評と言へば、聖書の缺點を探し出す事と誤解して居るのであります。

聖書の批評は或る人々からは之れ程嫌はれて居るに拘らず、實は殆んど凡ゆる**クリスチヤン**の既に實地にやつて居る事であるのであります。例へば或る人が若し新約聖書を舊約聖書よりは貴重なものであると信ずるならば、夫れは卽ち一種の批評的機能の働きたる結果と見なくてはならぬのであります。要するに聖書の批評とは、聖書のアラを探す事業ではなくて、たゞ正當に聖書を判斷しやうとす



るに外ならぬのであります。聖書が如何にして今日の有樣になつたか、其由來事情等を正しく詮義し、明白にしやうと言ふに過ぎぬのであります。聖書の起源を明かにし、其發達の跡を吟味し、今日に及びし事情を考へ、或は又著者のこと、著作の時代の形勢などを調べ、又時としては原本の由來變遷等を研究するものであるのであります。言はゞ聖書の批評は、眞面目なる聖書の研究者に缺くべからざるものでありまして、決して恐るべく厭ふべきものでは無いのであります。と言つて勿論私共は不謹愼なる批評は、之れを絕對に排斥しなくてはならぬのであります。

一ト口に聖書の批評と申しますが、之に三四の種別があるのであります。普通世間で言ふ『高等批評』及び『低等批評』と言ふのは、十八世紀の獨逸の學者**アイクホルン**の唱へ出したもので、高等批評とは主として聖書の一般的內容に關する研究で、低等批評とは主として聖書の本文に關する研究であります。『高等批評』

を以て何か破壊的の音調を帶ばしむるに至つたのは、之れをなす人の方にも幾分の責任はありませうけれども、其多くは全く此眞義を誤解した處にある樣に見えます。

亦『低等批評』の中には二種ありまして、（イ）本文の批評、（ロ）用語の批評とであります。本文の批評と言ふのは、聖書の原本若くは抄本其物に對する研究でありまして、若し其兩者の間に相違の存する場合には、何れが正確であるかを知らんと欲するのであります。時としては其相違の甚だ大なる事もあり、或は左程でも無い事もあり、亦原文の癈朽したるもあり、或は消滅した場合の樣なものもあります。故に熱心なる批評家の研究も餘り功を奏しない事が多くあり、一語一文の疑問のために、多年を費す事も珍らしくは無いのであります。夫れと同樣に用語の批評にも、また多くの困難があるのであります。聖書の用語の眞義を知らんと欲して、批評家は隨分慘憺たる苦心を致すのであります。時としては一言半句の研究



のために、數十種を下らざる解釋の提出せらるゝ場合も往々にしてあるのであります。今一例として羅馬書九章五節の改正英譯の本文と及び傍註、また腓立比書二章六節の欽定改正兩英譯を注意して研究して見るならば、蓋し其一班を窺ひ知る事が出事やうと思ひます。

『高等批評』は之とは異つて、重もに聖書の古文書の目錄及び內容を吟味するのであります。從つて無論低等批評の任務とする本文や用語の研究よりは、先き立つものであります。言はゞ各種の聖書批評の先決問題となるべきものが、取り扱はるゝのであります。古記錄の起源、年代など、其他總て聖書の文學的方面の構成に關する諸點を研究するのが、所謂高等批評の任務とする處であります。近來は之に『歷史的批評』と言ふものを加へる事になつて居ります。卽ち其記錄の信用程度を吟味するのであります。例へば高等批評の方で創世記に就いて言ふ時は、此書は本來傳說が言ふ如くモウセの作であるのであらうか、或は其作者は一

人であらうか、或は夫れに數人の作者の面影が在しはしまいか。果して然らば夫等の作者は何時如何にして此如き書を編纂するに至つたのであらうか、と言ふ樣な事を研究するのであります。然るに歷史的批評は、之に對して猶ほ種々なる疑問を持ち出すのであります。卽ち此創世記が私共に語り傳ふる事に、果して幾何の史實が存するであらうか、と言ふ樣な事であります。例へば古い文學類には得て有り勝ちな、所謂傳奇的、神話的要素とも認めらるゝ部分を除き去つて、果してどのくらひの眞實史的實說が殘るでありませうか、と言ふ事は確かに大なる疑問でありますが、之れは歷史的批評の主として任務とする處であります。

此如く見ますば、各種の批評が互ひに相賴り相助けて、完全に聖書の研究の目的が達せらるゝのであることは明かであらうと思ひます。用語の批評の結果として其言語の特徵が、時代の性質を知らしむるのであります。夫れが判明して、歷史的價値を知るの便宜が與へらるゝのであります。併し若し反對に此歷史的價



値の疑はるゝ場合には、自然に著者の事にまで種々なる疑惑が投ぜらるゝことになり、其記事までも總て怪しき事と見らるゝに至るのであります。私共が若し**チヨウサー**の詩に**エリサベス**女王の事があつたとすれば、其詩は十六世紀後半までには著作されなかつたものと斷定するのでありますが、夫れと同樣に、紀元前八世紀に存したと思はるゝ**イザヤ**の書に、夫れよりも二百年も後に存したる**クロス**王（サイラス王）の事があるとすれば、批評家は夫れに依つて、**イザヤ**書の少くとも其部分だけでも後世の作物だと斷定するに躊躇しないのであります。たゞに用語のみならず夫れに現はれたる思想などが若し異りたる時代の特徵を示して居ることが明かであるならば、矢張り同樣な斷定を下すに至るのであります。其他文章のこと、熟語のこと、文法のこと、皆同樣でありまして、悉く其時代々々の特徵を反射して居るのでありますから、夫等を詳しく研究することは、批評の各方面に種々なる資料を供給し、複雜なる影響を及ぼすのであります。

聖書を此如く研究すること、また此如き研究の結果は、勿論傳說的なる聖書の信仰に影響なくして止む事は無いのであります。併し夫れがために聖書の批評を悉く破壞的のものだと速斷してはならぬのであります。聖書の聖書たる所以は、批評の力ぐらひで毫も其價値を二三にするとの出來ぬ處に存するのであります。批評に依つて聖書の價値の左右せらるゝであらうかを心配する間は、私共は未だ直に聖書の天啓を信ずるものとは言へぬのであります。かの牧羊者の詩が、信仰を慰め勵ます事は、夫れが**ダビデ**のものであるか無いかに、少しも影響せらるゝ處は無いのであります。**イザヤ**のものであつても、或は夫れよりは後のものであつても、以賽亞書五十三章が私共の深い感情を動かすとには永久變りは無からうと思ひます。創世記の古雅を帶びたる美しき物語りが、たとへ**モウセ**の作であつても、或は他の人の作であつても、亦果して史實であつたか詩的傳說であつたかには拘らず、いつでも私共の心を引着して止まない事だらうと思ふのです。**イン**



**スピレーシヨン**に關する私共の說は、之れまで普通論ぜられて居る處と違ふかも知れません。併し其說に表はさんと欲する事實は殘つて居るのであります。卽ち聖書の著作の年代とか、著者の事とかは、批評の結果に依りて變化する事はありませう。けれども神の聖言は永劫に變る事は無いのであります。

# 第貳章　聖書の構成

今や私共は前章冒頭に申しておいた問題に立ち歸らうとするのであります。たゞ順序として、聖書の**インスピレーション**の事、批評の事を言はなくてはならぬ必要のために、暫らく問題を夫れに讓つておいたのであります。

## 一

たゞ一卷に取り纒められたる聖書のみを手にして居らるゝ今の人々に取りては曾つて舊約聖書も新約聖書も皆バラ〳〵に別なものであつた時代のあつたこと、は、容易に想像も出來ない事であるでせう。從つて數百年以前までは聖書の各卷各部分までが、皆多大の勞力を以て肉筆せられ、頒布せられたものであつたと言ふこと、而して其事實の中には如何なる事の含まるゝかを知らぬ人々が多からうと思ひます。故に若し之れを知るならば聖書の本文が、極めて正確に今日にまで傳はつたものであると保證するは甚だ困難な業であることに、直に氣付かるるでありませう。筆記者の目も耳も記憶も、絶えて彼を誤つたことは無かつたでありませうか。後の筆記者が先の筆記者の誤を、更に誤つた事が無かつたでありませうか。或る讀者が自分の感想を傍註に記入したのを、後の寫字者が夫れを本文に書き入れて仕舞つたこともあつた樣であります。中には「ワザ」と變更を加へたものも、間々あつた樣に見えます。舊約聖書が紀元前三世紀の頃、所謂七十人譯と稱せらるゝ希臘譯の出來る時分にも、此種の添削は隨分あつた樣でありますが、新約聖書の著者等が舊約聖書を引用する場合には、悉く其希臘譯を使用したものであります。希伯來語の舊約聖書の全部の抄本の始めて見出されたのは、紀元後千〇〇九年の事であり、一部分のやや古い抄本の發見されたのは同じ紀元後の九百十六年（何れも**ペテログラード**の帝室圖書館に保存せらる）であつた事を知るならば、既に無くなつた原文の最も正確なる寫本だに見るの望みは、今は殆んど

無いものと思はなくてはならぬのであります。

更らにまた思ふべきは希伯來語は本來はたゞ子音のみのもので、其の母音は後に附せられたものであることであります。夫れもたゞ本文の意味は斯くもあるだらうかとの推察に基いて附けられたものであるのです。そして其の母音の譜點の附けられたのは、紀元後七八世紀の事でありまして、卽ち原語たる希伯來語の既に死語となつてから、凡そ一千年を經過した後の事であるのです。然る處本來子音のみを並べ列ねたものに、想像のみから母音を添へると言ふ事には、隨分の間違ひの多かつた事は言ふを俟たない處だらうと思ひます。たとへば玆に brd があつたとすれば、夫れは少くとも bared, bored, bread, breed, board, bard, bird, bride, broad, 等に作るとが出來るのであります。尤も其前後の句が自然に暗示する處も多いのでありますから、實際に於いては此處に言ふ程の間違は無かつたでありませうと思ひます。けれども時としてはたゞ一つの意味のみではなく取れる



場合もあつたことは、否み難い事だらうと思ひます。其一例として希伯來書十一章廿一節を擧げて見ることが出來ませう。其處には死せんとする**ヤコブ**が『その杖の頭に扶』つたとありますが、どうも之れでは何の意味か一寸分かり難いのでありますが、試みに創世記四十七章卅一節を見ますると、其處には彼は『床の頭にて拜をなせり』云々とあります。卽ち七十人譯の譯者等が Hammittah（床）を Hammatteh（杖）と誤讀したものである事情が判明せらるゝのでありますが、必竟母音の添へ方を誤つたからの事であります。斯う言ふ樣な事情は、他にも隨分あることだらうと思ふのであります。

舊約聖書の本文が今日私共の持つて居ります樣に確定したのは、紀元七世紀から九世紀迄の事でありまして、夫れは『傳說の處有者』と稱せられたる**ユダヤ學者**等の一團に依つて成し就げられたのであります。併し困つた事には此頃には既に正確と稱し得べき原本と言ふものは無かつたので、何れも甚だしく缺損したもの

ゝみであつたのであります。故に其誤りたるを正し、汚損したるを原形に復することなどは彼等の最も困難したる事業であつたのであります。また彼等が此事業に取り掛かる以前、世間に流布されたる舊約聖書の抄本は多くあつたらうと思ひます――新約聖書の方も勿論多くありました――そして夫れが相互ひに隨分相異して居つたのでありますから、夫等を比較して居る間に相互の誤謬を正すを得たものもありましたらうが、併し彼等『傳說の處有者』等は自ら豫じめ選擇したる標準的本文と言ふものがあつて、夫れに反したものは動もすると多くの議論なしに斥けられて仕舞つた樣であります。夫れがために重要なる資料であつて、無慘にも棄てられてしまつたものも、尠くなかつた樣に見えます。之から言へば、私共が既に述べました舊約聖書の希臘譯を有つて居ると言ふことは、兎に角大に感謝すべき事であるのです。此譯文は未だ原文が多く紛失せず、毀損されない時分に出來たものでありますから、幸ひ今日私共は之れに依りて原文の光りに接



する箇處が隨分多いのであります。夫れでも今猶ほ澤山の不明の點のある事は、改正英譯の欄外を見れば何人にも直ちに明白になることであります。亦意味の不判明な本文もある事でありますが、夫れはつまり本文其物が不判明である爲めに外ならぬ事と思ふのであります。

新約聖書に就いて見ても之は同樣でありまして、其最も早く知られた抄本でさへも舊約聖書よりは古くはなく、また其數に至つても更に多いのであります。新約聖書の**バテカン**抄本は四世紀頃、**シナイ**抄本（**チッツエンドルフ**が發見したもので、千八百六十二年に出版され、今は**ペテログラード**の帝室圖書館にあります）は四世紀から五世紀頃、**アレキサンドル**抄本（英國博物館に保存せらる）と**エフレーム**古典（**パリ**の國民圖書館に保存せらる）とは五世紀頃、**ベーザ**古典（**ケンブリツチ**大學圖書館に保存せらる）は六世紀頃から知られて居ります。併し舊約聖書には母音の無かつたゝめに種々の困難を生じたと同じく、矢張り新約

聖書の場合にもいろ〳〵の困難があるのであります。卽ち新約聖書の希臘本には、語と語との間隔がなく、句點と言ふものもなく、全部が悉く花文字で一樣に書き列ねられてあるのでありますから、之を正當に讀むと言ふ事は一ト通りの難事では無かつたのであります。夫れに寫字の際に於ける略字符が混入した處もあり、筆耕の便宜にした符牒なぞも雜ざつて居り、また文字にまぎらはしき程似たのもあり、旁々隨分間違ひ易い點が多かつたのです。例へば提前三章十六節に於いて『神肉體となり』云々とありまして、日本譯にはハッキリ『神』となつて居りますけれども、原語では之れは頗る曖昧な代名詞で出來て居るので、一寸した點の打ちかたでどうでもなるものであるのです。而かも之れが頗る大切なる敎義の上に至大な影響を與へるものであるのですから、隨分厄介な事と申さなくてはなりません。英語は申すまでもなく何處の國語でありましても、文字と文字との間に間隙がなく、句點もなく、全部花文字で書き下し、夫れに處々略字を混入してありと



すれば、夫れを間違ひなく讀むと言ふことは、甚だ容易な事では無いのですが、新約聖書の原文は正さに夫れであつたのであります。

言ふまでもなく新約聖書の寫字者は、舊約聖書の夫れ等と同じく、寫字を爲しまする間に種々なる間違ひをなしたのであります。紀元二世紀の終頃に既に此間違ひのあつた事は、**イレニウス**等の申した處でも明白であります。今日私共が四つ或は五つの最も古い抄本を取つて見ても、相互の間に相異のあることは見るに難く無いのであります。之は人間の仕事としては當然の事と申すの外は無いでせう。筆記の間違ひもあり、讀み違ひや聞き違ひのあつた事も疑ひ無いのです。其處へ持つ來て敎會の敎義に一致せしめんがために、隨分故意に曲筆した場合も無いではありますまい。私共は此種の例の著しいものとして、約翰第一書の中に其一つを求むる事が出來ます。卽ち其中に三つの證者の事が(五〇八)ありますが、夫れの僞文であることは、宗敎改革以來一般の認むる處となつて居るのです。**エ**

**ラスムス**は一五一六年に發行したる希臘文の新約聖書第一版には、全く之れを省いて居るのです。**ルウテル**は自已の譯文には、矢張り之を除いて居ります。然るに彼れの死後に、何人かゞ挿入したとの事であります。改正英譯には既に之は抹殺されてあるのであります。

さりながら現今私共の手に傳へられて居る希臘文新約聖書の標準的本文は、比較的誤謬少なく、甚だ信用を措くに足るものであることは、眞に私共の喜びとしなくてはならぬ處であります。そして夫れの發見の功蹟と、夫れに與かりし學者の恩惠とは、感謝に價する事であります。併しながら夫れと同時に私共は亦、夫れの決して完全なもので無いこと、今日に於いて完全なものを得んとして能はざることを知らなくてはならぬのです。之れは口授的、無誤謬的天啓を要求する人々に取りては心外な點であるかも知れませぬけれども、全く止むを得ない事であるのです。



## 二

果して然りとすれば斯くも雜多なる材料が、抑も如何なる法則の下に、現今私共が所有する如き一卷の纒りたる聖書と言ふものに出來上るに至つたのでありませうか。何時何人に依つて所謂聖書の『正經』なるものが制定さるゝに至つたのでありませうか。而して又多くの文書の中より、正經と正經ならざるものとを甄別するに當つて如何なる權威の指導があつたのでありませうか。

此等は眞に問ふの易くして、答ふるの甚だ至難なる問題であります。而して想に正經の確定は、之れ全く漸次に進行したもので、恐らくは長い年月を要したに違ひ無いと思はるゝのであります。舊約聖書の示す處に依つても、今は失せたる多くの古書があつたに違ひ無く、私共の今持つて居る聖書の著者等は、皆夫等を資料に用ゐたものであるのです。約書亞記十章十三節には『**ヤシヤル**の書』のことがあり、民廿一章十四節には『**エホバ**の戰爭記』のことがあり、代上廿九章廿

九節には**ダビデ**王の治蹟は『預言者**ナタン**の書及び先見者**ガド**の書に記さる』とあります。また私共の列王紀略は多くの參考を『**ユダ**と**イスラエル**の王の列王の書』から取つたことが度々錄されてあります。其外にも之に類したものが數多く存した事が信ぜられます。されば此等は總て舊約聖書の著者等の使用したる後には、皆失はれて仕舞つたと見るの外は無いのです。而して夫れは現在私共の所有して居る正經に比して價値が無かつたと言ふ爲めではなくて、既に使用の目的が達せられた故であると申して然るべきでありませう。

然るに茲に又失はれたる此等の外に、現に存しながらも、尙ほ舊約聖書の中に入れられてない澤山のものがあるのであります。所謂『經外聖書』と稱せられ、或る場合の資料として重んぜられて居るものが夫れであります。而して此等が所謂聖書と言ふものからは、絕對に除外せられ、亦せられつゝあるのは、抑も如何なる標準、如何なる理由に依るのでありませうか。私共の觀る處によれば、歷史



の知識を供する上に於いては『**マカビース**の書』は、歷代志略と等しく重要なものであります。其想像を描いたものたるに於いて、『**ユデイト**書』は以士帳書と何も變りの無いのであります。若し『**トビイト**書』が正史に非ずとせば、約拿書も爾か言はなくてはならぬでありますまいか。かの『**ソロモン**の智慧』は眞實**ソロモン**の著で無いかも知れませんが、夫れは傳道書に就いても亦然りと言ふべきで無いでせうか。而かも其信仰的なる點に於いて、前者は確かに後者の上に在るものであります。然るに一は非正經となり他は正經となつて居るのですが、實に不思議な事と言はなくてはならぬのです。其理由としては、非正經の書は概して後世のものであると認められて居るがためであるらしいのです。**ロバートソン**、**スミス**は『**ユダヤ**人は**エズラ**の時代以後、天啓の時代は既に過ぎて傳說の時代が來たと言ふ樣な、朦朧たる意識を有して居つた』と申して居りますが、併し實際は**エズラ**の時代以後に出來たものであつて、正經の中に入つて居るものが無いでは無い

のです。卽ち歷代志略が其一であります。之れは國民の過去を書いたと言ふ點に於いて、正經の中に收錄されたらしいのです。また但以理書や傳道書の如きは、俘囚時代以前の作との認定の下に正經に數へられてある樣に見えるのです。

舊約聖書の目錄を揭げたもので一番古いのは、『**シラク**の子**イエス**の智慧』と題する書であります。その第四十四章から五十章に『偉人の讃美』と言ふ有名な一文がありますが、其處には『五書』の著者は**モウセ**であると言ふ事があり、夫れに續いて約書亞記、士師記、撒母耳書、列王傳、以賽亞書、耶利米亞書、以西結書、及び十二小預言者等の名が列擧せられてあります。また**ダビデ**の詩、**ソロモン**の箴言及び比喩談等が載せられてあります。此『**イエス**の智慧』は紀元前百九十年から百七十年頃までに出來たものと信ぜられて居ります。聊か注意すべきは此書の中に、但以理書と以士帖書との無い事であります。恐らくは但以理書は當時未だ著作されて無かつたらしく、以士帖書の正確と認めらるゝ樣になつたのは



猶ほ後世の事に屬するらしいのであります。卽ち舊約聖書の目錄の稍〻今日の樣に完成したものを見るのは、**ユダヤ**の歷史家**ヨセフアス**の時代からであるのです。夫れは紀元一世紀の終りのことでありますが、併し夫れさへたゞ一個人の意見でありまして、權威ある聖書の目錄としては未だ此頃でも何にも無かつたのであります。

古き傳說に由れば舊約聖書は、曾つて**イスラエル**人の俘囚の際に全部失はれたのであつたが、後ち**エズラ**が夫れを神の御告げに依りて、全く其儘書き直したと言ふのであります。併し之れは容易く信じ難きものであるのです。夫れよりは後世の事でありますが、私共は**タルムド**と言ふものを見るのであります。夫れは**ラビ**學者の傑作と稱せられて居るものであります。此**タルムド**が初めて舊約聖書を三部に分ちて、紀元三世紀から六世紀の間の記錄と申したのであります。律法とは主として所謂『五書』を指し、預言者を更

に二分して、先の預言者の中に約書亞、士師、撒母耳、列王紀略を擧げ、後の預言者の中に以賽亞、耶利米亞、以西結、及び十二小預言者を數へて居ります。而して記錄の中には詩の三書卽ち詩編、箴言と及び約百記とが入れられてあります。其後へ**メギロス**（五の卷物の意）と言ふものが加へられてあります。卽ち雅歌、路得、哀歌、傳道書、以士帖書と之れであります、最後に但以理書、以士喇、尼希米亞、歷代志略等を載せて居ります。

此**タルムド**の目錄に付いてはいろ〳〵な問題が生じて來るのです。何故但以理書が預言者の中に入らず、以士喇、尼希米亞、歷代志略が歷史書類の中に入らぬのでありませうか。之れは私共の見解に由れば、希伯來の正經は一氣に出來上つたものではなく、次第に成立したことを示すものだと思ふのです。第三部の蒐集の未だ成らざる中に、既に第一部第二部の蒐集が完成を告げ、其後に至つて猶ほ他のものが見出さるゝに從つて蒐集せらるゝと言ふ樣な事情が、右に言ふ樣な結果



を來したものと思ふのであります。さもなければ**タルムド**の目錄と其分類の法とは、全く何を證據としたものであるか分らぬのであります。

舊約聖書の中に『五書』（タルムドの所謂第一部）が最も肝要な地位を占める樣になつたのは、全く故あることで、夫れは**モウセ**と言ふ傑出した人物に關係あることでもあり、且つ其律法の事や、其他の物語りなど、悉く**ユダヤ**國民には重大な關係のあるものであるからであります。紀元前四百四十四年、**エズラ**が人民の前にて嚴かに讀み上げたと云ふ**モウセ**の律法の書とは（尼八章から十章）恐らくは五書の全體ではなくて、今日私共の間に祭司文書として知られて居るものゝ一部分であつたらうと思はれるのです。五書は紀元前四百年代の編著であらうとは批評家の一致したる意見でありますが、兎に角當初から**ユダヤ**國民の間には重要視せられて居つたことは、疑ない處であります。

第二部卽ち歷史と預言者の書の蒐集の成つたのは、多分紀元前三世紀の中葉以

後のことであつたでありませう。第三部に至つては基督の時代には猶ほ未だ成つて居らなかつたらうと信ぜられるのです。而して此第三部の蒐集は、專ら國民の靈的要求若くは其他の要求から成つたものと察せられます。卽ち詩篇は之れを誦して彼等の信仰を勵ますために用ゐられたのでありませう。**マカビース**時代に出來たる但以理書は、其表象的な處と、**メシヤ**に關する預表のために、いたく一般の人氣を博し、大いに歡迎されたもの丶樣に見えます。**ロバートソン**、**スミス**も申しました樣に、**ユダヤ**の學者等が權威ある聖書の目錄を作成せんとて急ぎつ丶ありし時に、或る信仰家の間には既に舊約聖書の多數が認められて、最早や學者の區々たる意見などでは如何する事も出來ぬ程度になつて居つたのであります。そして正經に關する爭論は、たゞ二三の書の上にのみ專ら限られて居つた樣な次第であつたのです。

其問題となつた二三の書とは、雅歌、傳道書、以士帖書などでありまして、不



思議にも此三書に限りて新約聖書には、たゞの一回も引用されて無いのであります。其理由は知るに難くはありますまい。雅歌は表面から見れば、たゞ一ヶの戀愛詩にしか過ぎぬのであります。夫れが正經の中に加へらるゝに至つたのは、夫れを無理に靈的に解して、**イスラエル**に對する神の愛を現はしたものだと見做された處からであります。傳道書の未來の生命に對する不徹底な信仰が人の厭ふ處となつたのは無理ならぬことであるのですが、之れが**ソロモン**の著作であると認められてのみ、非正經の禍から免かれたらしくあるのであります。以士帖書の粗暴なる復讐心は、到底**ユダヤ**人の歡迎する處とはなり難きものであり、且つ書中一回だも神の名の擧げられてないのも彼等の喜ぶ處となり得なかつたのです。夫れ故に紀元九十年**イアムニア**の大會に集合したる**ラビ**等は、傳道書と雅歌とを正經の中に採錄したにも拘らず、以士帖書のみは多くの異存があり、二世紀の終まで**ユダヤ**人の間には爭ひの問題となり、基督敎會では四世紀頃までは問題とせら

れて居つたのでした。

初代のクリスチャンは世末の近きを信じて、當時現存せるものに更に新たに聖書を加へやうとは思はなかつたのでした。彼等の聖書は舊約聖書に限られて、たとへば保羅の書簡の如きは、太く之れを尊重しながらも、かゝる折に觸れての書簡樣のものを、永久座右に備へやうとは夢想しなかつたのであります。然るに時は移りて、直接基督に接近したりし人々も次第に他界の人となり、加ふるに基督爾來の希望も容易に實現されざるを見るに至つて、始めて基督の言行を記錄したしとの要求を感ずるに至つたのであります。斯くして福音書が成り、續いて其他の記錄類も蒐集せらるゝに至つたのであります。現今私共の新約聖書と言ふものは、卽ち其一部分であるのです。而して始めて基督敎會に於いて公式に認められたる目錄は、所謂**ムラトリアン**の正經と稱せらるゝものでありまして、時は紀元二世紀の終でありますが、其目錄の中には私共の四つの福音書と、使徒行傳と、保羅



の十三の書簡と、第一第二の約翰書、猶太書、默示錄等がありまして、雅各書と彼得前後書と約翰第三書と希伯來書とは入つて居りませんでした。或る人々の考へでは此目錄は充分で無いと申すかも知れませんが、併し夫れと前後して存した他の二つの古き目錄も、大同小異のものであります。卽ち**シナイ**抄本には、此外に『**ヘルマス**の牡羊者』を同列におき、**アレキサンドル**抄本には『**クレメント**の書簡』が加へられて居つたのであります。

昔は**ポリカープ**や**バルナバ**等の書簡を始め『使徒等の正經』と言ふ樣なものがありまして、永い間私共の今の聖書と同一の權威を以て世に行はれて居つたことは事實であります。而かも一方に於いて初代敎父等の間には、希伯來書、雅各書、彼得前後書、約翰第二、第三書、默示錄などは、屢々其正經を疑はれて居つたのであります。夫れに紀元二世紀頃には、使徒等をはじめ名ある人々の名義の下に、いろ〳〵なものが世に使用されたものでありました。福音書、書簡、行傳、

默示錄と云つた樣なものが、**ペテロ**、**ヤコブ**、**アンデレ**、**ユダ**、**ピリポ**、**トーマス**、**ニコデモ**、**アリマテヤのヨセフ**、**ピラト**なぞの名を以て世に出で、中には相當に流行したものもあつたのでした。何分西方敎會の人々に取つては、此名の人々の爲したる跡など充分に知られて居らなかつたのでありました故、其名を以て出づる書の眞僞は彼等の判斷し得なかつた處であつたのも無理の無い事であつたのです。實際**ペテロ**の福音書と言ふものなぞは、紀元百九十年頃までは眞面目なクリスチャンの間に信用を以て行はれて居つたのであります。

兎に角聖書の正經は、非常に複雜したる事情の下に、極めて遲々たる發達を遂げて來たのであります。其如何なる事情の下に、かの大會なぞ言ふものが、此問題を決定するに至つたのであらうかは、今私共の簡單に述べ盡し難く思ふ處であります。けれども私共の觀る處に依りますれば、此は單に大會に於ける投票などによりて定まつたものと言ふよりは、寧ろクリンチャンの一般の意識に因つたと



云ふ方が適當であらうと思ふのです。つまり彼等の靈的生命の營養となるべき事實が認められた結果と言はなくてはなりますまい。私共の四つの福音書が正經たるを認めらるゝに至つたのは、必ずしも怪しむに足らぬ事でありまして、他の非正經の書に比較して見れば一目瞭然たるものがあるので、少しく注意して考察する人々には異議なき處であるべきであります。

紀元三世頃からは、疑義の存するものは、次第に影を消す事になつた樣であります。**ユウセビヤス**は四世紀の中頃に於いて、雅各書と猶太書と彼得前書と、約翰第二、第三書とを疑はしきものとなし、默示錄に至つては全然彼の表から除き去つたのであります。**ジエローム**は同世記の後半に於いて、東方敎會のみが希伯來書を正統と認めたと申して居ります。**ヒッポー**の大會は（紀元三百九十三年）正經を數へて『保羅の書簡が十三、同人の希伯來書――』云々と申して、西方敎會では漸く最近に及んで希伯來書を承認したものとなして居ります。四世紀の**スリ**

ヤの教會では、たゞ三つの書簡のみを認めたのでありました。即ち雅各、彼得前書約翰第一書でありますが、要するに此三人は教會の『柱』と認められて居つたと言ふ處からであらうと思はれます。**ラオデキヤ**の會議（紀元三百六十三年）では、未だ默示錄を除外して居りました。即ち紀元四世紀の末葉頃までは未だ新約聖書の正確の問題は確定して居らなかつたのであります。而して其確定したのも、言はゞ西方教會の勝利を示すものに過ぎなかつたのでありました。

而かも今日私共新教の徒に取つては、其確定に何等の權威があるものでは無いのです。併し新教主義は既往の大會などの權威を無視しつゝ、而かも自己が信仰の標準とする聖書の正經問題に對しては、稍々矛盾した地位に立つて居つたのです。境遇の關係からでありませうか新教の神學者等は、『**インスピレーション**とはたゞ聖者にのみ適用さるべき名稱である』と言つた樣な見解を持つて居つた事は、驚くべきであります。**ルウテル**は新約聖書の或る書にのみ格別なる**インスピレー**



**ション**が有つたとは思つて居りませんでした。彼の說によれば、雅各書は『藁の書簡』猶太書は『不必要な書簡』、希伯來書は『誤りたる悔改を敎ふる書』でありました。默示錄に至つては、之に聖靈の働きがあつたと見るべき何物もなかつたのであります。之れ勿論**ルウテル**一已の意見でありますが、併し新敎の大立物たる彼としての說であることも忘れてはならぬと思ひます。**ヅウイングリー**は默示錄は『聖書的の書では無い』と申して居りました。**カルヴイン**は保羅が希伯來書に關係のあつたことを否定し、**ペテロ**が彼得後書を書いたものとは信ずる事が出來ませんでした。

然れども改革者等は、彼等が斯く批評したるものを全然聖書の中から廢棄し去らうとはしなかつたのです。彼等は單に聖書の著者と言ふ樣な事にのみ、重きをおく事がなかつたのです。誤つて著者の名を冒かすことがあつても、夫れはたゞ一時の榮へに過ぎず、書夫れ自身に固有したる價値が無かつたならば、永く其名

譽を保有することが出來ぬのです。之は洵に爾うあるべき筈であつて、改革者等の、爾かく考へたのは當然の事であります。希伯來書の、かの信仰に關する立派な議論の如きでも、夫れが保羅のであつたか其他の人のものであつたかは、全く第二の問題と見做してよろしからうと思ひます。夫れと同樣に大會や其他の會議の決議でも、私共に取つては左程重きをおくに足らぬ事と思ひます。眞正の決議の權は、監督や議會の手にあるでなく、亦學者や神學者等の手にあるでもなく、所謂誠實なるクリスチャンの集合其物にあるのであります。聖書の價値は、貴族の決議で定まるのでなく、平民の投票に依るのであります。適者の獨り生存するが如く、聖書の存住は靈的淘汰の夫れに依るのであります。



## 第參章　五　書

（創世記、出埃及記、利未記、民數記略、申命記）

**ユダヤ**人の宗教生活に於いては、律法として知られたる所謂『五書』なるものは、極めて特殊の地位を占有したものでありました。此五書に於いて彼等はたゞ天地開闢の物語を讀むのみならず、彼等自らの種族の起源を學ぶのでありました。彼等の祖先なる**アブラハム**と、其子孫に對する神の約束、又世の多くの國民の中に彼等のみ獨り**シナイ**山に於いて律法を與へられたと言ふ事の如きは、眞に彼等の感激なしに讀むとの出來ぬものでありました。五書は實に彼等の由緒香ばしき過去と、光榮ある末來に關する記錄でありました。世界の起源と歷史とに始まり、**イスラエル**の物語りに入り、**モウセ**が建國の事業から其死に至るまで、彼等は實に無限の誇りを以て讀んだものであります。

## 一

紀元前四百四十四年**エズラ**が改革の時から基督降生に至る間に於ける**ユダヤ**人は、國の獨立を失ひて、獨り宗教上に於いてのみ勢力の殘の閃きを示したのでありました。彼等が法律の民となつたのも、此間の事でありまして、五書なるものゝ重んぜられた事は、實に非常なものであつたのです。同時に此五書は**モウセ**彼自身から由來したものであるとの觀念は、甚だ彼等の尊ぶ處となつたのであります。初は單に律法の或る部分に限られたのでありましたらうが、自然の結果は五書の全體に及んで、遂に悉く一括して之れを『律法』と稱し、尊敬いたらぬくまもなかつたのであります。卽ち之は總て神聖なるもの、誤謬なきもの、**モウセ**に與へられたる直接の天啓、皆神の眞の言葉を記載したものと稱せられて居つたのであります。併し**モウセ**が著者であると申しても、必ずしも悉く彼が手を下して筆を執つたとの意味ではなかつたらしいのであります。『**モウセ**が己が智慧に因



つて一句節までも皆書いたと言ふのは、神の言を拒むことになる』とは**ラビ**の格言であります。

五書が**モウセ**の書いたものだとの信仰は、新約の時代の前、凡そ三四世紀頃から漸く始まつたものであるとは、殆ど疑なき事であります。舊約聖書に於いては約書亞記から馬拉基書に至るまで、何處を見ても五書が**モウセ**の著であるとの暗示をだに見出すことが困難であり、亦五書自身にも何等の證據と見るべきものが無いのであります。或る著者の申した事に『申命記の最後の一章を除くの外、五書全體が**モウセ**の著であるとの考は**ヨセフアス**などに起源を發したる一般**ユダヤ**人の說であるが、聖書の何處にも此說と一致する處はなく、五書自身は言ふまでもない事である』云々とあります。併し私共が之を注意して讀みます時に、處々**モウセ**自身の書いたと思はるゝものはあるのであります。出十七章十四節に依れば、主は**モウセ**に、**レピデム**の戰爭のことを記錄せよと仰せられたとあります。

同じ出卅四章廿八節には、**モウセ**は神の御命令に依りて十誡を書いたと記されてあります。また民廿三章には**イスラエル**の小供の旅行記があつて、之は**モウセ**が手書したものだとあります。申卅一章九節には『**モウセ**が此律法を書いた』とあります。其他同様の記事を、五書の中に二三ヶ處を見出すことが出來るでありませう。此等は總て此記事の通り**モウセ**の實際書いたものでありませうか。若し眞實**モウセ**の書いたものであつて、而かも**モウセ**の書だと特に言うてある處を見れば、其他は**モウセ**のものにはあらずとの斷定を下しても差支なきものゝ樣にも思はるゝのであります。

**ユダヤ**人が何等の疑なく律法の著者を**モウセ**と承認したる理由は、之を知るに難くはありません。彼等は斯く承認するに由りて、自ら神の選民であるとの自尊心を堅くするを得たのであります。彼等は之あるに由りて、自らを他の國民と甄別したのであります。尤も之より曩き**モウセ**自身が、既に此國民的自覺の種子を



充分蒔き付けておいたのであります。**モウセ**は此點に於いても長く靑史に、其不朽の名を記したものと言ふべきであります。

併し今日に於いて**モウセ**を以て五書の著者となすことは、到底支持し得べき說ではありますまいと思ふのであります。玆には僅かに二三の點を擧ぐるのみで、充分でありませう。申卅四章五節六節にある**モウセ**の死と、**モアブ**に葬られたとの記事を、彼自身の記したものとは何人も思はぬでありませう。また民十二章三節に『**モウセ**はその人となり溫柔なること世の中の諸の人に勝れり』とあるを、誰か著者自身の筆の跡と思ふとが出來ませうか。また創卅六章卅一節に『イスラエルの子孫を治むる王いまだあらざる前にエドムの地を治めたる王は左の如し』とありますが、之は少くとも**モウセ**の時代よりは百年後の事實であります。尙ほ創十二章六節に『アブラハム其地を經過してシケムの處に及びモレの橡樹に至れり其時にカナン人其地に住めり』とありますが、之を私共が、**カナン**人が尙ほ此地

を所有して居つた時分の人の手に成つた文と見るとが出來ませうか。之明かにカナンの地は、既にヘブル人なる新來の民に依つて、取つて代られた以後の人の書いたものと見るの外は無いではありますまいか。而かも讀者の熟知せらるゝ如く、モウセは終ひにカナンの地に入るとの無かつた人であります。

此等は皆モウセより以後の成文たることを表はせるもので、五書全體がモウセの作であるとの說は到底其儘支持するとの出來るものでは無いのです。之と同時に私共は、五書の記事の重複せるものを指示して、此書の著者の一人で無かつたと言ふ事を申したいのであります。創一章から二章三節までと、二章四節から廿五節までに、天地創造と及び人類創造の記事が重複されて居ります。また大洪水の物語も（創六〇一—九〇十七）之を仔細に研究すれば同一の事件の別種の物語をば混同して、一つの文章に作り上げたものであることは頗る見易い事であります。地の上の墮落と、神が總ての生物を滅ぼさんとの決心は六章五から七と、十



一節から十三節とに記され、ノアの方舟に入るべきを命ぜられたることは六章十八節より廿二節と、七章一節から五節とに重複され、たゞ其動物の數のみが兩者僅かに異つて居るのみであります。

亦創十七章十五から十九と、十八章九から十五とに、アブラハムの子孫に對する約束の記事が二つ掲げられて、兩方共にイサクの名に付いて別箇の解釋を與へて居ります。更に亦創十二章十から廿、廿章、廿六章六から十一に殆ど同じ樣な物語が載つて居りますが、私共は之を觀るにドーモ同一の事柄の變體であるとしか思ふ事が出來ぬのであります。アブラハムが二回とも——一回はエジプトに於いてパロ王に對し、一回はゲラルの王アビメレクに對し——同じ目的のためにサラを彼の妹と僞はり、而かも二回も同じ結果を得たと言ふのは如何にも不思議な事であります。次にイサクの場合の事に就いては、前二者の異曲同構の物語であらうとは、大概の保守主義の學者等も認めて居る處であります。創廿八章十九章

と卅五章十五とに、**ベテル**の名の起源に關して二つの異つた由來が記されてあります。其如く創卅二章廿八章と卅五章十とに於いて、**ヤコブ**に**イスラエル**の名の與へられたことが二回異りて物語られてあります。其他にも未だかゝる重複の記事がありますが、**モウセ**にもせよ他の著者にもせよ、若し之れがたゞ一人の作であるならば、かゝる重複の記事の存する理由が分らぬ事であります。況んや矛盾したる記事に於てをやであります。之此書の單なる著作ではなく、雜多な材料を取捨したる編纂物であることを推察する事が出來るのであります。

或る論者は主基督の律法を指せる場合には、いつも之を**モウセ**のものかの樣に申されたのを證據として、以上に私共の述べた說に反對を唱へるのであります。彼等は之が爲めに約七章十九、路十六章廿九、卅一、可十章三等を引照するのであります。併し此點に於いては私共は基督をすらも、最後の權威と認むる譯には行かぬのであります。私共は宗敎上、心靈上の眞理の範圍に於いてこそ基督の權威を



認めるのでありますが、其他の普通の知識——例へば天文、地質、地理、文學の批評等に關しては彼も亦時代の兒でありまして、人たるの制限を出づることが出來なかつたと觀ずるのであります。彼は舊約聖書の著者のことなどに關しては決して正確なる知識を有つて居つたものではないのです。基督當時の世では五書は全く**モウセ**の著であると信ぜられて居つたので、基督はたゞ此普通の信仰を其儘に襲用したと言ふに過ぎぬのであります。彼としては夫れで事が足りたのでありました。著者のことなどに對して批評的の研究をなすのは、彼にありては毫も必要のなかつた事でありました。併し何は兎もあれ基督は、五書の著者の何人であるかに拘らず、極めて大膽に律法を批評し去つたのであります。夫れは私共が山上の垂訓でも讀んで見れば、直ぐに分かる事であります。されば著書其物に就いてさへかく超然たる見解を有し給うた基督は、著者の事など餘り重きをおき給ふことのなかつたのも無理の無い事であります。

## 二

かくて私共は五書の眞の起源と、及び其構成の由來に關して、更に積極的の研究を逐げなくてはならぬのであります。之がために今暫く私共は簡單に、**イスラエル**國民の歴史を回顧するの必要を感ずるのであります。先づ第一に此國民の起源をば、假りに傳說に從ひて、**モウセ**の時に初まつたものとして見ると、既に五書などに記さるゝ樣な立派な立法的國體のあり得んがためには、當時相當に進步した社會があつたものと見なくてはならぬのであります。既に祭司の階級や利末の階級などがあつて、彼等のために隨分細密なる法則があり、彼等の義務と特權とが定められて居つたのでありました。極めて複雜なる儀式や夫れに關する律法があり、五つの犧牲に關する定めなどもあつたのであります。其他にも種々進步したる法律や規定の類が、非常に多かつたのであります。就中當時既に靈的なる一神敎の信仰が、可成り進步したる形を以て存在して居つた樣に見えます。而し



てたゞ獨りの神が、たゞ一の聖處に於いてのみ拜せらるゝのでありました。『汝らの神**エホバ**がその名を置んとて汝らの支派の中より擇びたまふ處なる**エホバ**の住居を汝ら尋ね求めて其處にいたり』て神に仕ふ可きでありました。(申十二〇五)

之が**モウセ**が其民に與へたる律法、立てたる制度、定めたる儀式、示したる宗敎思想であつたのであります。而して夫れが紀元前十四世紀當時の狀態であつたと言ふのでありますが、果して私共が是より後に學ぶ處の**イスラエル**の歴史の實際と、能く一致する事が出來ませうか。私共は少しく研究の歩を進めて見たく思ひます。

私共は**モウセ**及び其後繼者の時代から引續き三四百年間の彼等の世を見まするに、曩に五書に於いて見たるものとは全然異なつた世界の樣を見出すのでありまして、少なからず驚かさるゝのであります。卽私共士師記を讀みますると、此處に見出さるゝものは能く一致結合したる人民ではなくして、相異れる幾種族もの人

民であるのであります。私共が約書亞記を讀んで知る樣な一定の土地を所有せる安固たる生活の民ではなく、彼等は常に土着民と戰ひて、辛うじて足大の地を收得せるに過ぎず、**アマレク**、**ペリシテ**、**モアブ**なぞは彼等が不斷の强敵であつたのであります。而已ならず此士師の時代に於いて私共の觀る**ヘブル**種族と言ふものは、其文化の程度と宗教の觀念に於いて、到底利末記や申命記などに於いて見出さる樣な進歩したものとは同日の論ではなく、極めて低級なものであるのです。私共は此處に定りたる祭司のありしを見ず、犧牲はたゞ亂雜に到る處に於いて獻げられたのであります。亦偶像禮拜と多神教とは普通に行れて居つたのであります。政治上に於いても宗教上に於いても、其秩序は太く亂れて居つたのであります。

之實に私共の觀る士師の時代の實況でありますが、果して然らば正さしく文明の逆行であるではありますまいか。此間、**モウセ**の律法、若しくは其集錄したる五書なぞは、如何になつて居つたのでありませうか。如何にして此文明の逆行があつ



たのでありませうか。之實に解し難き事と言はなくてはならぬのです。

五書と士師記との間には事實此如きの隔絕があるにも拘らず、一方士師記と撒母耳書との間の關係は頗る自然のものであつて、毫も此如きの隔たりを見ることが無いのであります。而已ならず其間に於ける進歩の經路の、極めて秩序正しきものゝあるを認むるを得るのであります。卽ち此間に於いて**ヘブル**民族と言ふものは頗る親密に融合一致し、外部の壓迫を受けて、おのづから國民として起つべく能く苦悶奮鬪を遂げたのであります。前時代の特色たる無政府の狀態を出でゝ、次第に一定した秩序を生み、最後の大なる士師**サムソン**に代りて王統の興起を見るに至つたのであります。而かも尙ほ此時代にさへも、五書に錄さるゝが如き儀式の守らるゝことなく、寧ろ其樣な律法のありし痕迹だも見るに至らず、私共は未だ太古文明の初期に出遭ひつゝあるかの感をなすのであります。詩篇に於いて知る**ダビデ**は其靈的調子の甚だ高さを示すのでありますが、併し實際歷史上の**ダビ**

デは家に偶像を祈り（母前十九〇十三、十六）他の神に仕へ（廿六〇十九）神の怒を宥めんとてサウルの小供七人を人身御供となしたのであります。（母後廿一〇一―十四）此如く一般から言へば宗教、道徳、政治の各方面ともに、徹母耳書の中には猶ほ多くの野蠻と迷信との存するに拘らず、夫れでも之を士師記と比較する時は、甚だ進歩の跡の歴然たるものがあるのであります。何人も之を疑ふことが出來ぬのです。

夫れから更に二三世紀を過ぎて、所謂預言者なるものゝ出現せる時代となるのでありますが、彼等はよくイスラエルの過去の歴史を知り、亦其間に神の導きのあつた事を知り、國民をして神に從ふべきを奬め、頻に過去の記憶を呼び醒さんと欲したのでありました。たゞ彼等の關知しなかつた、一つの事があつたのです。夫れは卽ち律法でありまして、彼等から見れば律法はたゞ宗教の一方面であつて、專ら儀式典禮の事に屬するものと見られたに過ぎなかつたのでありま



す。が併し若し眞に此當時に、律法と言ふものが存在して居つたものならば、預言者等に此態度があり得なかつた筈であつたのです。律法があつて、夫れを彼等は等閑に附したと言ふ樣な事は、實際あり得べき事ではなかつたのであります。

預言者アモスは（紀元前七八五年頃）エロボアム二世を非難するに熱心でありましたが、而かもエロボアム一世が建立したるもので紀元前八世紀頃まで存して居つた金の犢を拜するとに就いては、何等言ふ處が無かつたのでありました。且一方に於いて彼は曰く『我は汝らの節筵を惡みかつ藐視むまた汝らの集會を悅こばじ、汝ら我に燔祭または素祭を献ぐるとも我れこれを受納じ汝らの肥たる犢の感謝祭は我れこれを顧みじ……イスラエルの家よ汝らは四十年荒野に居し間犧牲と供物を我に献げたりしや』云々（廢五〇廿一、廿二、廿五）また夫れよりは凡そ一世紀半後のエレミヤは一層强き言葉を以て申しました。『そはわれ汝等の先祖をエジプトより導きいだせし日に燔祭や犧牲とに就いてかたりしことなく又命ぜし

ことなし、惟われこの事を彼等に命じ汝ら我聲を聽ばわれ汝等の神となり汝ら我民とならん且我が汝らに命ぜしすべての道を行みて福祉をうべしといへり』云々と。(耶七〇廿二、廿三) 然るに若し**モウセ**の時以來殆ど七百年、利未記の儀式禮典が神より與へられ命ぜられたものとして國民の間に眞實崇敬せられて居つたものならば、預言者等の斯かる言葉は到底あり得べきでなかつたのです。

併し**エレミヤ**の時代は**ヘブル**人の宗教歴史に於ける最も重要なる出來事の一つ卽ち**ヨシユア**の改革の時に一致するのであります。其時(王下廿二〇)以前何人も耳にした事のなかつた律法が、神の宮に於いて發見されたのであります。而して歴史以來始めて**エルサレム**が神を禮拜する中心の地となり、各地に散つて居つた聖處は悉く取り除かれたのでありました。卽ち此處で當然起り來る問題は、此如き律法の書が常に國民の間に存して居つたものならば、今まで人々の注意する處とならずに居つたと言ふのは、如何なる理由によるのでありませうか。**ヨシユア**は勿論



之を**モウセ**の律法と心得て居りました。併し私共は思ふに此『發見』は、時世の必要に應じた勸告若しくは律法を、古文に模して或る人々の作りたるもので、所謂其當時の宗教改革に使用した企ての結果であつたらうと推察するのです。**ヨシユア**の行つた此宗教革新の事業が如何に根本的で且大なるものであつたかと言ふ事は、たゞに偶像禮拜の聖地を破壞したと言ふだけではなくて、**イスラエル**の神**ヤーウエ**の地方的聖地をも悉く徹回したと言ふ事に於いて見ることが出來るのです。之まで各地に於いて**ヤーウエ**に仕へて居つた祭司は悉く**エルサレム**に引き上げられ、其處にて種々なる副業をも授けられたのでありました。此革新の結果は、**ヨシユア**等が豫期したのものよりは甚大なものでありました。併し此事業の爲めに使用されたる所謂『律法の書』は全く新しいものであつたやうです。或は恐らく夫れは私共の『所謂申命記の核』と稱せらるゝ、其十二章から廿六章までの部分であつたかも知れぬと思はるゝのであります。

**ヨシユア**は實に立派な人物でありましたが、併し其敬虔なる信仰も彼を其怖るべき死より救ふを得ず、亦國民を**バビロニア**の囚れから免がれしむる事が出來なかつたのでありました。然る處此**バビロニア**の囚れこそは、**イスラエル**の宗教の發達に大なる關係を有したる事件であつたのであります。たゞに宗教の方面のみならず、**イスラエル**の社交、政治其他萬般の方面に、非常なる影響を與へたる出來事であつたのであります。**ユダ**の民として囚れ行きたる彼等は、宗教を中心として團結したる國民として歸つて來たのでありました。夫れから凡そ百年を經た後『**モウセ**の律法の他の書』が突如として亦現れ出でたのでありました。夫れは蓋し**エズラ**が紀元前四五八年**バビロニア**から持つて歸つたもので、同じ四四四年、町の城壁の修築成つた後、嚴かに民の前に發布したものでありました。此時しも舊約聖書の宗教は、實に其發達すべき處にまで達したので、基督の時代に於いて見る樣な充分に發達したものとなつたのであります。**エズラ**が從



者と共に律法を朗讀し、人民が堅き約束を爲したる時に(尼九〇卅八)所謂舊約の宗教たる『**ユダヤ教**』が呱々の聲を上げたもので、而かも之は決して突然現れたものではなくして、永い間の極めて複雜なる進歩の道程を經て來たものであつたのでした。

**ヨシユア**が申命記の或る部分を示したることゝ、後に再び**エズラ**が夫れと同樣の事をなしたる以上の事情は、私共をして或一つの結論に達せしむる樣に思ふのです。**ヘブル**の國民が出埃及から降つて約一千年**バビロン**の俘囚から歸る時まで、其永い間の文化の時を通じて、國民も將た其靈的指導者も、かの樣な崇高な律法の常に存したのを全く知らざりしかの樣に見えるのはどうした譯でありませう。而かも其律法はズット後の社會の事情でなければ適しない樣なものであるのも不思議な事であります。其儘で見れば、ズット後世でなければ、使用の出來ない樣な律法であるのです。私共が普通の歴史の學び方では、斯う云ふ倒さまな

事實を如何にしても認むる事が出來ないのです。一般の事情よりは遙かに先んじた法制を布くと言ふことは政治の原則でない樣であるのに、**モウセ**のみは其時代の一體の文化の水平よりは凡そ一千年も進んだ法制を布いたものと考へなくてはならぬのでありますが、之れは果して如何なものでありませうか。寧ろ律法と言ふ樣なものも其他のものと同じく、一般の文明と生活とが複雜になればなる程、複雜になつて行くと言ふのが通則ではありますまいか。**ヘブル**の國の事情のみが之れの反對に行くと言ふ譯も無からうと思ふのであります。併し私共の斯く申しますのは『超自然に反對する傾向』を帶びたもので、聖書の批評的研究の罪だと非難せらるゝのであれば、强ひて爭ふ事をせぬ積りであります。

茲に亦私共の記憶すべき利末記と申命記に載せらるゝ法律、命令、儀式など、之れのみが所謂五書が有する唯一の律法の部分では無いのであります。申命記の律法が利末記のよりは簡單である如く、出廿一章から廿三章までにはモット簡單



な、而かも農業的生活を主としたる太古の民族の必要に最もよく適したるものと思はるゝものがあるのであります。而して私共は此事實から明白な一事を學ぶのであります。卽ち五書の律法の中にも其基本的性質の斯く異りたるものがあつて、大體に於いて單純から複雜に進んだと見らるべき事實は、私共が一方に於いて學ぶ樣な此國民の歷史の各階梯と能く一致するのでありまして、其時々に必要なる法律が編制され、律法は民の生活と文化の實情に應じて作られ、決して一時代一人の人に依つて與へられたもので無いと信ぜらるゝのであります。初は先づ、遊牧的生活から漸く農耕的生活に移つた太古民族のために短かき法典が作られ、夫れから少しく進んで既に背後に幾何かの歷史の過程を持てる國民のために、更に長き法典が作り與へられ、一層進んでは既に幾多の訓練を經て宗敎的生活にさへも入りたる國民のために、儀式禮典を主としたる更に完全なる律法が與へられたのであります。

極めて簡單ではありますが、以上は近代舊約聖書學者の研究になれる結論の一端でありますが、要するに律法の中の最も古き幾部分にはモウセ其人に歸すべきものゝあるを認めつゝも、尙大體に於いては以下の如き年代順に排列するのであります。

（一）出埃及記廿一章から廿三章までの『契約の書』と稱するもの、紀元前約九百年代のもの。

（二）申命記の中心をなして居るもの、卽ち十二章から廿六章まで、之は紀元前約七世紀の中頃に蒐集され、紀元前六百廿一年ヨシユアの治世に及びて始めて世に出でたるもの。

（三）創世記の中から十一章程、出埃及記の中から十九章、民數記略の中から廿八章、夫れに利末記の全體を加へて成れる所謂『祭司法典』と言ふもの、之はエズラがバビロンから携へ歸つた法律書でありまして、彼が紀元前五三八年に



彼の國を出でゝ同じ四五八年エルサレムへの旅行の途中に編纂したものゝ樣に見えます。（利末記の中の十七章から廿六章までの所謂『神聖律』と稱するものは紀元前五八六年から五三八年に涉る俘囚時代のものと稱せられます）

## 三

併し以上に申述べたことは主として五書の中の或る部分に關係したものであります。想ふに一般の讀者に取りては、五書は既に永い間よく知れ渡りたるものであり、且つ其物語りは頗る興味多きものでありませう。天地創造を叙せる雄大なる文章に始まり、人祖がエデンを出で、散じて各地に割據するに至りしこと、バベルの建設、言語の混同、さては洪水の物語、ノアの子孫の繁殖、夫れより族長等の歷史を叙し、轉じてイスラエルの埃及に於けるパロの難、英雄モウセの起りて民の指導者たるに至りし次第――卽ち出埃及の記、カナンの移住、曠野のさすらひ、而してモウセが悲劇の死に至るまで、眞に變化應接に遑なく、趣味實に

湧くが如きものがあるのであります。

然る處此等の記錄――五書は果してたゞ一人の著はしたものでありませうか。其意匠も文體も言語も、皆よく統一したる書き物であるのでありませうか。且つ亦五書の中の所謂物語の部分を別として、之れは既に大體述べておきました――は果して正確なる歷史的記錄でありませうか。之れ實に困難一ト通りならぬ問題でありますが、私共の之に對する答は、極めて否定的のものであるのです。私共は五書の此部分にも亦種々なる古典諸記錄の混じて居ることを認むるのであります。決して單純なる著述の類で無い事を信ずるのであります。以下私は出來るだけ其混雜したる古典の種別を探求し、其由來を明かにしたいと思ひます。

私共の爲さんと欲する此事業に最初に指を染めたる人は、佛蘭西の醫家なる**ジアン、アストラツク**と言ふ人でありました。彼は一七五三年『創世記を書くた



めに**モウセ**が使用したと思はるゝ原の材料に就いての推定』と言つた樣な一書を著はして、此問題を論じたのであります。之れより曩き彼は熱心に創世記を研究して居る間に、其中に神に就いて用ゆる名に二つの別あることに氣付いたのであります。夫れは卽ち『**エロヒム**』と『**ヤーウエ**』と言ふのでありまして、私共の日本譯の聖書には『神』と『**エホバ**』と譯されてあるのであります。而して創世記を見ますると、或る部分には其名の一が多く用ゐられ、或る部分には他の名が專ら用ゐられてあるのを發見するのであります。また時として物語りの重複されてある場合には、神の名の用ゐ方に多少の違ひのあるのを見出すのであります。其處で此事に氣付いた**アストラツク**は少くとも此處に二種の基本的文書があつて、**モウセ**は夫れを使用して現在の舊約聖書なるものを編纂したものであらうとの、推斷を下したのであります。此**アストラツク**の研究に刺戟されて、爾來舊約聖書の批評的研究と言ふものが長足の進步をなして、全く面目を一新するに至つたのであります。

其批評約研究の遂げられたる結果として、今日では舊約聖書の基本と認めらるゝ文書を數へて、通例四つとなして居ります。卽ち(一)**ヤーウエ**記錄、之は神の名に**ヤーウエ**を用ゐてある處から稱するのでありまして、便宜のため之をJの記號を以て表はして居ります。(二)**エロヒム**記錄、之も矢張り神の名に**エロヒム**を用ゐてある處からで、之れはEの記號を以て表はしてあります。(三)申命記々錄、之は申命記の大部分が之から出來て居ると信ぜらるゝ處からでありまして、之はDの記號を以て表はされて居ります。(四)祭司記錄、之は祭司の手に成りたる祭司的記事から成り立つて居ると認められたる爲でありまして、Pの記號を有して居ります。つまり此第四種の記錄を土臺として、所謂『五書』と言ふものが出來て居ると見做されて居るのであります。而して此事實は既に廣く世に知られて居る事でありますから、今私は餘り詳しく述ぶる事を爲ない積りであります。



兎に角く此等の記錄は各々其特色を有して居るのでありまして、判然各自を區別し得べきものがあるのであります。夫れで以下に少しく、夫等の點を述べておきたいと思ひます。

一、用語　此等四種の材料に各々用語の特質があるのであります。別けてもP記錄の文學上の特質は、極めて著しいものがあるのであります。例へば私共が一寸創世記を見ましても『永への契約』だの『生めよ殖へよ』だの、或は『……の傳は左の如し』『其類に從ひて』など言ふ事があり、亦其『靈』を人格の意味に用ゐたるなど他のものとは皆著しく違つて居るのであります。**イスラエル**人以前の**パレステナ**の住民に就いては、E文書は常に『**アモリ**人』と稱し、J文書は『**カナン**人』と稱して居ります。同一の山でありましても、Eは**ホレブ**山と言ひ、Jは**シナイ**山と申して居ります。またEにありては**モウセ**の義父を**エテロ**と云ひ、Jは**ホバブ**と稱して居るのであります。其他の固有名詞にも用語の相違が隨分あるのです。**アブラ**

ハムに小供の與へらるゝ約束に就いても、創十七〇十五—廿一と十八〇九—十五とでは明かに違つて居りまして、前者のP、後者のJたること殆ど疑なき處であります。夫れからまた同一の事件を記して居るのにも相違があります。且つDの用語と文體とはイザヤ、エレミヤの中間の時世に適當したものであることは、學者の多く一致する處であります。たとへば『ヨルダンの彼方』など言ふ句は、紀元前七世期の中葉ならでは通用しなかつたものであるのです。卽ち之は東部パレステナを表はすもので、モウセが入らんと欲して能はざりし西部パレステナからでなくては言ひ得ない言葉であるからであります。

二、制度　制度や法律の事に就いての記述の相違も、稍ゝ著しいものがあるのです。併し此事に付いては他の處に於いても折り〳〵述べておいた處であります から今此處で多くを言ふの必要が無い樣に思ひます。たゞ言ひ洩した二三の點を、此處で注意する事に致しませう。出廿一〇から廿三〇までの所謂契約の書に於い



ては、申命記にある樣な、或る場處に限りて犧牲をなすべき規則などは無いのであります。JとEとに由れば、族長等は到る處に祭壇を築きて犧牲をなしたと記してあるのですから、斯う言ふ規則の無いのは怪しむに足らぬ事であります。出廿〇廿四には明かにヤーウエは『我が名を錄す何處にても』犧牲を献ぐることを許したとあります。然るに申命記十二〇十三には力ある言を以て『汝愼め凡て汝が自ら擇ぶ處にて燔祭を献ぐることをする勿れ』とありまして、たゞ一ヶ處のみ神の許し給ふた聖處があつたとあります。申十五〇十二には、ヘブルの奴隷は七年目には解放せらるべしとあるのに、利廿五〇卅九—四十三には、之れをヨベルの年まで留めおくべしと錄されてあります。申十八〇には祭司とレビ族とは同じ階級のものとして見られつゝある樣でありますが、祭司文書には彼等の間の區別は頗る判然たるもので、レビ族の劣れる由を錄して居ります。要するに此樣な相異の點は、各文書の間に尙ほ甚だ多い事でありますが、今は此くらひに止めておき

たいと思ひます。

三、宗教　神の觀念及び夫れを表はす方式に於いて著しい相異のあります事は、天地創造を記したる三種の記事、即ち創一〇—二〇四(P)と二〇四—廿五(J)とを參照して見れば、何人にも頗る明かな事であります。Jの特質は、其擬人的な表し方にあると思ひます。即ち之に由れば、**ヤーウエ**は地の塵から人を造り生命の氣息を鼻に吹き入れ、園に樹を植ゑ、男の肋骨の一を以て女を造つたと言ふのであります。然るに之に對してPの記錄は全く趣きを異にして居ります。之に由りますれば**エロヒム**は混沌たる表面に動いて成つた靈でありまして、そして彼の手に成れる創造は、彼が定めたる自然の方則に依つたものかの樣に見えるのであります。Jの**ヤーウエ**を描ける處は著しく繪畫的であり、Pの**エロヒム**は遙かに崇高で且つ靈的であります。**ヤーウエ**は、恰かも**ケモス**が**アムモン**の神であつた樣に、**イスラエル**の神であり、**エロヒム**は全く宇宙の神であつて、



始に天と地とを造つたものであります。また神の名を表はすことに於いても、記錄はいろ〳〵であります。J物語たる創廿四〇三に於いては**アブラハム**は『我れ爾をして天の神地の神**ヤーウエ**を指して誓はしめん』と曰ひ、P物語たる出六〇二、三に於いては『エロヒム、モウセに語りて之に曰ひ給ひけるは我れはヤーウエなり我れエル、シャッダイとしてアブラハム、イサク、ヤコブに顯れたり、然れど我名のヤーウエなることは彼等知らざりき』とあります。同一の記者の記事としては、到底解し難きものであります。

之れだけの事を述べたる後、私は進んで此等の四大記錄其物に就いて、聊か述ぶる處ありたく思ひます。

J、**エホバ**(若くは)**ヤーウエ**記錄　此は四記錄の中にありて描寫最も鮮やかな興味多きものでありますが、大體に於いて物語が其多くを占めて居るのであります。其宗教上の教訓は主として人物と事件に關係したもので、律法上の關係に於

いてゞはありません。此記錄の表せる神は著しく擬人的であることは、曩きに述べた通りであります。私共は**ヤーウエ**の鼻、目、笑ひ、打つこと、立ち、坐し、歩みなどを見るのであります。彼は日の冷しき頃に園の中を歩み、人の建てた塔を見んとて天より降り來り、**アブラハム**の待遇を受けられたのであります。

從つて其物語は總て私共が他の處に於いて見る、**ヤーウエ**の名に適はしきを思ふのであります。此記錄の宗教上の精神は、昔の豫言者等の夫れに連絡するものであります。依つて恐らくは此記錄は紀元前九世紀頃のもので、南ユダ國の產物であらうと信ぜらるゝのであります。そしてJの記者は當時世に行はれたる傳說の多くを、其材料に用ゐたることは言ふまでもありませんが、夫れに彼自身、更に古き資料に由つて意匠を加へたものと思はれます。

E、**エロヒム**記錄　之れはJに關係せる處多き記錄でありまして、恐らくは殆んど同時代か、或は少しく後世の產物であつたらうと思はれます。Eの記者も多



くの傳說を基としたのでありますが、其中にはJの夫れに似たるものもあつた樣であります、併し申すまでもなく大體に於いては、固より彼自身の特質を有つて居るのであります。JとEとは始め暫らくの間は、全く別々に世に流布されて居つたでありませうが、漸く紀元前七世紀の頃に及びて、或る編纂者の手に因つて一つのものに纏められたやうであります。編纂と言つた處で固より近代的の意味で言ふことの出來るものではなくて、至つて無技巧的に接ぎ合はされたに過ぎぬものである事は、其重複と矛盾の箇所の多きを見るに依りて知る事が出來るのであります。此記錄の著者は、北の**パレスチナ**の場處と人物とに特別なる注意を拂つた樣であります。かの北**イスラエル**王國の英雄**ヨセフ**を現し、**エフライム**を神の寵兒として書いたものは此著者であります。故にJは特に**ユダ**に關係して筆を執つた如く、Eは**エフライム**に起源を發した記錄である樣に見えます。

D、申命記々錄　之は其名に依りて直ちに其特色を知ることが出來やうと思ひ

ます。何時頃の産物であつたかに就いては、曩きに喇か述べておいた積りであります。**ヘブル**文學の初期のもので無い事は、其文體から見て察せられます。夫れは甚だ精練されたる雄辨でありまして、此如き技術の餘程進んだ時代のものと見らるゝのであります。亦**アモス**、**ホゼヤ**、**イザヤ**、**ミカ**など八世紀代の豫言者が、此書にある樣な國民的禮拜に關する禁止のことに就いては更に知る處なかりしに拘らず、**エレミヤ**（紀元前六二八—五八六年）に至りて此書の感化の痕を見るを得るに依りて、更に明かであります。申命記の聖地と犧牲に關する律法は、時の人々の宗教生活に於ける烈しき革新であつたのであります。**ヘブル**宗教の預言型から祭司型に移り行く初期を示して居るのであります。Dの編纂成りて間もなく、JとEとに合編せられたもの樣でありますが、多分五八六年**エルサレム**陷落の時分でありましたらう。そしてこれでJDEの三記錄が蒐集編纂されたのであります。



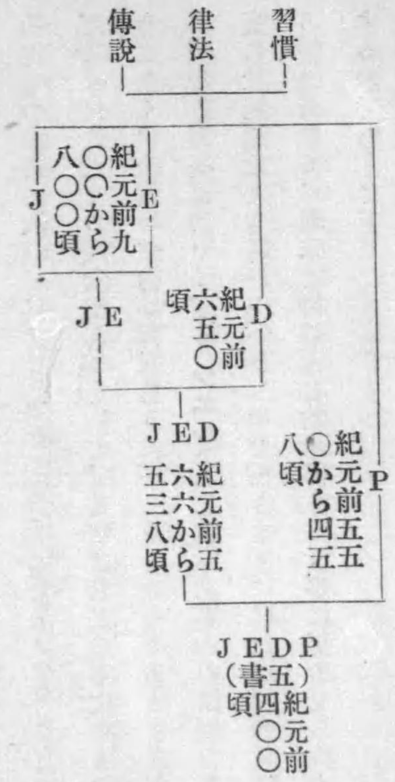
P、祭司記錄　以上に擧げたるJEDを除いた五書の殘の部分が卽ちP記錄であるのでありまして、之が五書の中に最大部分を占め、且つ最も新しき部分であるのであります。多くの物語と共に、律法や系圖や、また人名表や、神殿などに關する詳しき記錄でありまして、出、利、民の大部分を包括して居るのであります。曾つては五書の中にて最も古きものと考へられて居つたのでありますが、今は反對に最も新しきものと見られ俘囚時代前後のものと認められて居るのであります。其生き〳〵したる自然的の書き振りは、到底JやEの及ばざる處、其調子は一般に枯淡で、形式的律法的で、其傾向は著しく祭司的で、用語は千篇一律とでも言ふべく、變化乏しきものであります。而して神を擬人視することは務めて避けんとするかの態度を有するは、全く此記錄の後世のものたる證據であります。Pの教義の立場は、今日の私共にも學ぶべきものが多いのであります。此點がDよりは餘程多い樣であります。其歷史の部分は多くはJとEとより得たるも

のでありまして、律法や規則の部分に折り〳〵挾み入れたにしか過ぎぬのであります。此記錄も亦叙述の方法、事柄、皆時代の印象を帶びて居るものであります。以西結書四十章から四卽ち俘囚時代の痕迹を掩ふことが出來ないのであります。十八章あたりに見る樣な調子を、思はしむるものがあるのであります。此記錄も亦一人の手に成つたものではなくて、**バビロン**俘囚の前後にありたる祭司たる學者等のものを、蒐錄したるものであるとは疑ひないのです。確かに四五八年**エズラ**が**バビロン**から**エルサレム**に歸り來る時に持つて來たもので、夫れから十四年の後に『神の律法』若しくは『**モウセ**の律法』として嚴かに人民に服從を命じたものであつたのであります。此P記錄の世に出でし頃には旣にJEDは行はれて居つたので、軈がて或る編纂者の手を通して此記錄も其中に纏めらるゝに至つたのであります。勿論彼此の材料に、種々なる取捨は行はれたのであります。そして五書が今日私共の持つて居る樣になつたのは、紀元前四百年よりは以前でなかつ



たらうと信ぜられます。

此如く五書に關する傳承的の說と、現今の舊約聖書學者の見解との間には、眞に大なる溝渠が存するのであります。而して私は、以上に揭げたる研究の結果が今日多數の讀者諸君に躓きを與ふるが如きもので無い事を、堅く信ずるものであります。秩序の搔き亂さるゝ時に却つて眞正の善きものが殘る樣に、聖書の批評的研究の結果に依つて、却つて讀者は眞正の寶を得らるゝことになるのであります。五書は之れ大なる殿堂でありまして、其壁は名工の手になり、一ヶの石も由緒なきはなく、全體の結構は仰ぎ見るに堪えたるものであります。而して其パノラマの樣なる舞臺に於いて、**イスラエル**の宗敎が、世界大の演劇をなして居る有樣は、實に壯觀無比とも言ひつべきものであります。私共は讀者諸君が親しく此偉大なる書に接して、趣味と利益とを兼ね得らるゝ事に努力せられんことを只管ら希望するのであります。






# 第四章　舊約聖書

## 一　歴史

五書がモウセの著でもなく、また彼が編纂したものでもなく、實は紀元前四百年頃――モウセよりは約一千年も後に至りて漸く完成したものだとすれば、茲に當然いろ〳〵な疑問が生ずる譯であります。其中でも最も肝要な疑問は、五書に錄さるゝ物語は、總て正確に歴史的のものであるだらうか、或は單に傳奇的物語、神話の類であるのだらうか。若し爾うならば、私共は當時の歴史を探究すべく、何處に立脚點を求めて可いでありませうか。

### 一

古に遡るだけ確かな事の知り難いのは、何處の國の歴史でも同じでありませう。遠く進めば進む程、史實の要素は稀薄になるのであります。此點に於いてイスラ

エルの歴史のみを例外とする譯には行きますまい。

舊約聖書學者の一般に信ずる如く、創世紀の天地創造說や、族長の事、洪水の物語など、皆バビロンから輸入せられたものであると言ふ說に對しては、其正否を論ずることは蓋し容易なことではありますまい。たゞ私共には、バビロンは世界文明の搖藍であり、其處からナイルの地方へ移住したる最初のものは、實に基督以前五千年であつたらうと信ぜらるゝのであります。當時彼等は既に、相應な敎養を有して居つたのであります。而して我がパレスチナの如きは、ヘブル種族が此國を占有する以前、永い間實にバビロンの領地であつたのであります。故にヘブル人が此國に入り來つた時には、彼等は世界開闢の事に關する種々なる神話や想像が、既に此地にあつたのを見出したのであります。されば後からの此移住民は、夫等を彼等の藥籠に收むることをしなかつた筈は無からうと思ふのです。本來詩の中にありし此民族が、新たに見出したる其神怪なる物語を、空しく逸し



去らしむる樣な事は萬無かつたらうと、私共は信ずるのであります。其バビロンの天地創造說及び洪水の物語は、ニネベのアシユルバニバル王の圖書館に保存されてあつたのが、今から四十年以前に發見せられて、私共に知らるゝに至つたのでありますが、舊約聖書の物語は之に負ふ處あるは、爾來學者の疑はぬところとなつたのであります。此バビロンの物語は隨分古いものであると認められて居りますが、セイスの如き保守主義の學者が、之を紀元前廿二世紀から廿三世紀のものだと申して居ります。

今私は其中の幾部分を申して見ようと思ひます。バビロンの物語にもヘブルの物語と等しく、創造から洪水の間に生存したる族長の數は十名だとあります。（創五章參照）其三人目は聖書の方ではエノスと言ひ、バビロンの方ではアメロンと申しますが、何れも『人』の意味です。四人目は前者ではケナン（鍛冶）と稱し、後者ではアムメノン（細工人）と言ひますが、双方共『巧みな職人』を意味して

居るのであります。私共は之を單に偶然なる一致とのみ、見られぬ様に思ふのです。別けて著しきは洪水の物語の類似であります。**バビロン**の洪水物語は、以下の如きものであります。神々が**ユウフラテス**河畔に立てる町**シユリパツク**を、洪水を以て滅ぼさんと決し、智慧の神**エア**は其破壞の警告を住民の一人なる**ウト・ナピシチム**に傳へ、彼をして舟を造り、其中に『種々なる種類の生命の種子』を取り入るゝことを命じたのであります。而して舟を造ること、瀝青をもて塗ることなど、皆**ウト・ナピシチム**の手を以て爲られました。茲に興味ある事は、同じセミチック語系に屬する瀝青と云ふ語が、兩方に用ゐられてあるとであります。かくては洪水いたりて、たゞに**シュリパック**市が滅亡したのみではなく、全人類が溺死したのであります。やがて水減じて、地の面再び現はるゝに至り、舟は**ニッシル**山に止まりました。夫れから**ウト・ナピシチム**は如何いたしましたらう。かくて私は鳩を放ちました



私は彼女を心の任に行かしめました
彼方　此方に
鳩は飛び行きました
彼女は休む處を見出さで
遂に歸つて參りました

かくて私は燕を放ちました
私は彼女を心の任に行かしめました
彼方　此方に
燕は飛び行きました
彼女は休む處を見出さで
遂に歸つて參りました

かくて私は鴉をり送出しました
私は彼をば心の任に行かしめました
鴉は遠くに飛び行きました
水の減んじたのを見て
食ひつゝ啼きつゝ
遂に歸つて參りませんでした

其處で**ウト・ナピシチム**は舟を立ち出で、**ノア**と等しく犧牲を献げたのであります。

神たちは香をかぎ　神たちは能く香をかぎました
神たちは犧牲の上に蠅の如くに群がりました。



極めて概略ではありますが、如何に兩方の物語が能く似て居るかの一班を知ることが出來やうと思ひます。たゞ異なつて居りますのは、其道德上乃至心靈上の點でありまして、神々の論爭などが行はれた樣に錄されてあります。聖書の方にありては『元始に神』其全能の聖旨に從ひて、天と地とを造つたとありまして、總て汚惡なる神話の面影が無くなつて居るのであります。ですから**ウト・ナピシチム**と**ノア**の間にも、同じく大なる相違があるのです。前者は『甚だ賢き人』であつたとありますが、後者は『義しき人』であつたとあります。**バビロン**の物語では、神々が互ひに爭ひ、犬の如く怒り、蠅の如く群がつたとあります。然るに創世記にありては、洪水は新しき性格の印象となり、倫理宗敎の眞理を表徵するものとなつたのであります。故に此物語は、よしや其源を**バビロン**に發したにもせよ、

之れに依つて反つて**イスラエル**人の宗教的天才を遺憾なく發輝し得たと思ふのであります。粗雑なる材料を受けて之れを充分に聖化し、美くしく移植し得たる才能は實に驚くべきものと言ふの外は無いのです。私共の聖書の物語が、如何に上よりの感化を蒙つたであらうかを最もよく知らんとするには、此物語に就いて深く研究するに越したものが無からうと思ひます。

併し私共は此傳説と神話の薄暗き周圍を出でゝ、歴史の晴れ渡りたる空を見るまでには、まだ可成り長い旅路を經なくてはならぬのであります。古代の民俗に精はしき人の知る如く、元始時代の住民は、傳説或は神話と眞正の歴史との境界を判別するに暗く、屢々之れを混同して毫も怪しむことをしないのが普通であるのです。**ウイリアム・テル**の物語りでも、彼れが林檎を射たと言ふ一條は、確かに**スカンデナヴイヤ**の神話から飜案された作り話であらうと思ふのです。**テル**自身が既に實在の人物ではなくて、矢張り神話的のものであつたらうと思はれるの



です。舊約聖書の約百記の如きでも、**ヨブ**と言ふ人間が何時何處にかあつたものではありませうが、併し約百記一篇は確かに史實を描いたものではなくて、たゞ**ヨブ**なる一人物を借り來りて著者自身の人生觀を吐いたに過ぎないものと思はれるのです。

希伯來人は**カナン**の地に移住して來たものでありますが、其時には既に先住者があつて、夫れ〴〵の傳説や神話などを有して居つたのであります。其處へ希伯來人自身の朦朧たる歴史や傳説をも輸入したのであります。此等種々なるものゝ混同錯綜したものが、軈がて**イスラエル**祖先の記錄の土臺となつたのであります。私共は偶然にも創世記廿三章に於いて、其實證を見出すのであります。**アブラハム**が**ヘテ**人**エフロン**から墓地を買つたと云ふことは、此**マクペラ**の洞穴が、土着民の宗教と關係のあつたものであることを、希伯來人自身に知つて居つたことを表すものであるからであります。

此故に私共は族長等の歴史を語れる太古の記事が、果してどれほどの史的事實が含まつて居るのでありませうかを、問はなくてはならぬのであります。恐らくは始めには何等かの極めて僅かなる核子的事實があつたのでありませう。夫れを基本として、詩的想像なぞが加はりつゝ、次第に意外なものに發達したのでありましたらう。博士**ピータース**の説を引けば『族長等――**アブラハム**、**イサク**、**ヤコブ**なぞ――の物語は、其大部分までは**イスラエル**以前の口碑若しくは神話の類であつたのが、彼等の此處を占有したる後其儘に襲用せられて、夫れに彼等自身の歴史的傳説が結び合はされ、個人のものとなり又系圖的のものとなつた』のである様に思はれるのであります。かの**カナン**の地に於ける**イスラエル**祖先のさすらひの旅の姿を描ける、頗る牧歌的なる物語も、其中に果して幾何の史實が含まれて居るでありませうか。恐らくは之れたゞ眞實一篇の牧歌に外ならないので、將來彼等が**カナン**を占領すべき運命を預想したる、何人かの文藝のすさびにしか過



ぎなかつたのであらうと思はれるのです。此如く古き名工の手に成れる聖書の繪畫も、よく見れば其中なる人物の纒へる衣服の、往々にして全く中世紀的なるもの、げにおぞましき時代錯誤の曝露とこそ申すべきでありませう。Jや E の描ける族長等でも、其思想は皆紀元前九世紀代のものでありまして、彼等は歴史の蓋然性には全く無頓着であつたのであります。**アブラハム**が曠野の町々のために**ヤーウエ**に祈たる祈の、其時代のものとしては餘りに優しく亦人情的に過ぐるではありますまいか。されば亦『地の審判者如何で義を行はざらんや』と言つた**アブラハム**の態度は、其時代のものとしては全く考へることが困難なものであります。此如き倫理的性質、道德的義務を神に歸したのは、餘程後世の事に屬するのであります。此種の物語を生産し得たのは**アブラハム**ではなくて、實は初期の預言者等の精神であつたと思ふのです。

猶ほ私共は太古の人々の持つて居つた他の傾向を思はざるを得ないのでありま

す。卽ち彼等は過去の斷片的なる記錄などを、己等の個人の物語若しくは冒險談に作り代へ、或は夫れと反對に己等の實際の事件をば祖先の英雄等の爲した事の樣にする習慣を持つて居つたのであります。私共は古い傳記類を讀む時など、能く此傾向を心に留めておかなくてはならぬと思ふのです。

希伯來人の心に最も强く印象したる種族的記錄の樣なものが若し存したとするならば、夫れは恐らく彼等の祖先が**エジプト**に於いて壓制を蒙つた時の事で無くてはならぬと思ふのです。之は實に彼等種族に取りては、最も記憶すべき事件、また經驗であつたからであります。然るに此物語は、たゞ二度創世記の中に、個人のことの中に編み込まれて錄されて居るに過ぎぬのであります。卽ち**アブラハム**と**ヨセフ**の物語であります。創世記十二章を見ますると、**アブラハム**が其妻と共に**エジプト**に行きたること、妻は偶然**パロ**の宮殿にいたりしこと、**ヤーウエ**が**パロ**と**パロ**の宮中に疫病を下し給ひしにより、彼等は大なる富を携へて**カナン**



に歸つたとありますが、此處に私共は**イスラエル**の奴隷事件を個人化したる物語の一を見るのであります。また私共は**ヨセフ**が**エジプト**の牢獄に囚はれたと、夫れから免れたことのかの記事を讀む時に、同じ物語の他のものを讀む思があるのであります。たゞ此度は**エジプト**の歷史と文學とから、實際に借り來りし資料が混じて居るだけが違ふ處であります。**エジプト**の歷史を見ますると、**パロ**、**アメンホテプ**四世が、セミチック系統の、**ヤンハム**と呼ぶ大臣を有して居つたことは事實であります。但し聖書記者の云ふ**ヨセフ**は、此人と同一であつたかどうかは明白ではないのです。また**エジプト**に於ける農業上の狀態も、或る時代にありては、確かに創世記の記事を裏書きするものであるのです。また**エジプト**に『二人の兄弟』と題する傳奇的物語が行はれて居りまして、夫れが**ヨセフ**と**ポテバル**の妻との事件に酷似して居るのも事實であります。兎に角く斯樣に聖書の記者等は今日で言ふ所謂地方的色彩を表はすことに中々巧みではありましたが、併し今日埃

及學者の研究する處に由れば、惜しい事に彼等の使用せるエジプト名は、實際其物語のあつた當時のものよりは、遙かに後世のものであるらしいのであります。之も亦時代錯誤の悲しき曝露でありまして、聖書の記者等は文學の作者であつたと言ひ得ても、歴史家とは稱し得ないものであることを現はして居るのです。私共の斯うした結論を申しますのは望む處では無いですけれども、而かも全く止むを得ないことであるのです。併し同時に私共の慰藉となすを得べきは、私共は此物語に於いてたゞに善き文學よき藝術を有すと言ふだけはなくて、善き倫理よき宗教を有すると云ふ事であります。之れ實に最も尊き事であるのです。之れを思ひますれば歴史上の事、其他の事は實は第二位の問題でありまして、此書を有する私共の不朽の寶であることには、永久に何等の影響を與ふることはないのであります。

## 二



併しながら今や私共は族長時代の口碑傳説の境を越えて、改めて希伯來國民の歴史の時代に進み入らなくてはならぬのであります。口碑傳説に由りて擴大潤飾せられたる處あるは到底認容せざるを得ないのでありますが、而かもかの希伯來種族が埃及に在りて壓制苦役に服したる時代の、實際あつたと言ふ事には何等疑ふべき理由は無いと思ふのであります。而して彼等が其埃及の苦役を免かれて、他に移住するに至りしこと、其際彼等のために偉大なる先導者のあつたと言ふこと、亦其先導者はたゞに彼等を奴隷の家から救ひ出したのみならず、彼等を律法の教師の下に教へ導き、更に高き宗教的訓練を與へ得たと言ふことも、總て疑ふべき餘地が無いことの樣に思はれます。希伯來民族はモウセの天才に如何に負ふ處多きかを、自ら深く感じて居つたであらうかは、私の既に述べたる處であります。彼等は此偉大なる恩人を思ふごとに、其權威の歸せらるゝ五書と言ふものを眞に崇敬の目標となして、感謝尊敬措く處を知らなかつたのであります。

申す迄もなく五書に於いては、世界最初の物語から、**イスラエル**民族の最初のこと、**モウセ**の死の時までの事が錄されてあるのであります。而して其歴史は之れより更に進んで第二の神殿の時代から、**エズラ**が律法の宣言をなせる時までに及ぶのでありますが、夫れを錄せるものは總て以下十二書に渉つて居るのであります。（イ）約書亞記、士師記、撒母耳前後書、列王記略上下、路得記、（ロ）歴代志略上下、以士喇書、尼希米亞書、以士帖書、等卽ち夫れであります。其中にて前者ば**モウセ**の死の時から、紀元前五八六年**エルサレム**が陷落し、住民皆俘虜となりて敵國に送られたる時までの事で、後者は**アダム**から**ダビデ**に至る九宗家の系圖を掲げたる文章に初まりて、**ダビデ**の時から紀元前四三二年の頃までの事を錄して居るのであります。夫れを今簡單に述ぶる事に致しませう。

**約書亞記**は本來五書と密接なる關聯を有する書でありまして、かのJEDPの同じ四種の記錄から成立して居るものであります。五書が錄すべくして錄さずに



殘したる部分を此書に於いて見出さるゝのでありまして、故に近頃では此書を加へて『六書』と稱して居る程であります。約書亞記は記事の內容を、二つに分類することが出來ます。卽ち一章から十二章までは、**イスラエル**人が**ヨルダン**を渡りて、**カナン**を征服したるまでを物語り、十三章から廿四章までは、其占領したる地をば種族の間に分配したること、**ヨシュア**の最後の有樣等を錄して居ります。前者は主としてJE記錄の繼續したるもので、後者はP記錄であります。勿論D記錄の感化の迹も、僅かに見らるゝ處があるのであります。

一體**ヨシュア**其人が、史的の人物であらうかに就いて、幾分の疑點があるのであります。同時に此書に記さるゝが如き勝利の物語は、全く史實では無いと思はる、節もあるのであります。たゞ之は遠き後世に至りて完成せらるべき出來事を（出廿三〇廿九、卅、參照）一時に短縮して記したる記事であるらしいのであります。假りに此戰爭の記事を史實と見るとしても、此物語の骨子となつて居る處の、か

の虐殺の記事の如きは、之を取り除いて仕舞ふべきものではありますまいか。約書亞記の中、JEの部分は、紀元前八九世の源から出でたものと見ることが出來ますが、全體として今日私共の見るが如く成つたのは、五書と同じく紀元前四世紀頃の事と思はれます。

約書亞記に錄さるゝが如く**カナン**人の、希伯來民族のために容易く征服されたと言ふ物語は、事實としてよりは寧ろ一編英雄的ロオマンスであらうと思はるゝ事は、**士師記**の全部を通讀して明かにすることが出來るのであります。士師記は**ヨシュア**の死から**サムエル**の誕生まで、凡そ四百年間の事蹟を錄したものであります。私共が前章に於いて一寸述べた通り、士師記に於いても、また撒母耳書に於いても、未だ確かと結合された國民の狀態は無いのであります。ただ種族的に結ばれたる封建的のものがあつたのみで、定まりたる土地の所有もなく、而かも絶えず周圍の敵からは襲擊を蒙つて居つたのであります。宗教上の方面に就い



ては、無論此如き時世に在りて、非常に高尚なものが存し得べく、期待さるべき理由は無いのであります。夫れは至つて幼稚なものであつたのです。亦完全なる律法なども、有つた樣には思はれないのです。士師記と撒母耳書とを通じて**モウセ**の名は、六回記されてありますが、而かもたゞの一回でも律法を與へたものとしては記されて無いのであります。猶太教の基音となつて居る『律法』と言ふ語は、たゞの一回も無いと言ふのは、可成り不思議な事實であります。

士師記の歷史の多くは、恐らくは口碑若くは神話の類である樣に見えますが、夫れにしても尙ほ私共に取つて價値あるものがあるのであります。夫れは此如き暗黑なる時代——人々おのれの目に是とみゆることを行へる——を通して、希伯來民族の發達進步し來りたる道程に就いて、私共は幾多の知識を得る事が出來るからであります。此書は私共の爲に、希伯來文學の最古の二つの紀念碑を、保存してくれたのであります。卽ち**デボラの歌**（五〇）と、**ヨタムの物語**（九〇七—十五）

とであります。何れも恐らくは紀元前十二世紀代のものと信ぜらるゝのであります。亦**ミカ**の『神々の家』（十七〇）**ギベア**人の犯罪と其滅亡（十九〇—廿一〇）などは、此當時に於ける宗教及び社會の狀態を、最も良く私共に知らしむるものと思ひます。**バラク**、**デボラ**、**ギベオン**、**ヨフタ**等に關する物語の如きは、紀元前約一千年頃の蒐集なるべきかと思はれますが、併し士師記全體の今日の如くなつたのは、恐らく紀元前五百年、若くは夫れ以後のことと察せられます。

**路得記**は私共の聖書では士師記の次にあり、其內容も『士師の世をおさむる時に』あつた事の樣に申されて居りますが、實は決して同時代のもので無いことは、之れはユダヤの正經にありては、第三集卽ち所謂『物語集』の中にあるに見ても、明白な事であるのです。何となれば此『物語集』は、前の二集の全く完成し終るまでは出來て居らなかつたものであるからです。私共は此美くしく優しき牧歌に於いて、事實的物語の服裝の下に、一篇の宗教的ロオマンスを見るのであります。



今の人の所謂『目的を有する小說』と言ふものが、之れであるのです。一篇の結構は、蓋し**エズラ**の政策に反對するにあつたと思ひます。卽ち當時**エズラ**は、外國の婦人を妻とせる**ユダヤ**人に、强ひて離緣を迫まつたのでありました。**モアブ**人なる**ルツ**は、能く其姑と姑の民とに仕へたこと、亦**ボアズ**に嫁して**ダビデ**の祖先となつたと物語りて、**エズラ**の政策に對する反證となし、外國の婦人を妻とせるものゝために辨證の目的を達しようとしたのであります。斯くて此書は『たゞ肉體上の系統のみならず、心の特質が大切であること、亦誠に信心深き異邦の婦人との結婚は**ヤーウエ**の祝福する處であるとの主意を表はさんと欲した』のであつたのです。私共は此書を紀元前五世紀の中頃のものと信ずるのであります。

## 三

**撒母耳書**に至りて私共は口碑の時代より、次第に正史の時代に入りつゝあるの

であります。と申して撒母耳書に、正史にならぬものが全く無いとの意味では無いのです。矢張り此書に正史ならぬ部分が多く存することは言ふまでもないのですが、併し夫れのある場合にも事實を主となしてあるのであります。即ち正史と正史ならぬ部分とが主從の關係を有して居りますので、大體に於いて私共正史の圏内に入つたものと申して差支へなからうと思ふのです。撒母耳書は本來はたゞ一卷のものであつたのです。而して之を撒母耳書と申しまする譯は**サムエル**が此書の著者であつたと言ふためではなくて、此書の始めの部分に於いて、彼が最も主要なる地位を占めて居るからであります。**サムエル**の誕生に筆を起して、其士師たりし時代から王國建設の事に及び、夫れより**サウル**、**ダビデ**の治世の大部分に至るまでの**イスラエル**の歴史を録したものであります。而かも此書に記さるゝ出來事は、多くは極めて細密なる點にまで渉つて居るのを見ますれば、編者の使用したる材料は可成り完全なものであつて、其當時の人物のことなど良く録して



あつたものと見えます。特に後書に於ける**ダビデ**の傳記の如きは、宮廷の史家の筆に成つたものであらうと稱せらるゝ程のものであります。而己ならず其筆致の如きも極めて凡ならず、**バテセバ**の子の死に逢ひて王の歎きたる、**アブサロム**の死に際して彼が失望を叙したるあたり、稀に見る雄偉なる文章であります。人情の奥秘を傳へ、文學の精華と申すべきものであります。

此書の編纂者は亦種々なる口碑傳説を、使用の材料としたる事は疑ひないのです。而かも夫れが往々一致を缺いて居る樣であります。即ち前書十六〇十四—廿三を見ますれば、**ダビデ**は『琴に巧にして亦豪氣にして善くたゝかふ辯舌さはやかなる』ものとして詳しく**サウル**に紹介され、夫れから間もなく**サウル**のために其武器を執る者となつたと録されてあります。然るに次の章に至れば、更に亦事變つた事情の下に述べられてあるのであります。彼は偶然軍の陣へ送られ、其**ゴリアテ**の暴慢を打ち懲らしたる時にも**サウル**は『この少年は誰なるや』と尋ね

たとあります。（撒前十七〇五十五—五十八）曩きに既に彼は王に近く侍べれるものであつたと錄されてあるのに對しては、此記事は如何にも解し難きものになつて來るのであります。夫れからまた『**サウル**もまた預言者の中にあるや』と言ふ諺言の由來に關して、二つの全く異つた解釋が載せられてあるのであります。（撒前十〇十—十二と十九〇廿二—廿四）亦**サウル**が王位に卽きたることに關して記せるもの三回（撒前九〇—十〇十六、十〇十七—廿七、十一〇十五）而かも同じ彼が王位に卽くことを拒まれたることが二回（十三〇八—十四、十五〇十—卅一）記されてありますが、之を私共は如何に調和せしむべきでありませうか、頗る困難なる問題と言ふべきでせう。おまけに此十五章の中にも、其十節を見ますると神が**サウル**を王となせしを『悔ゆ』とありまするのに、廿九節には神は人に非ざれば『悔ゆることなし』と記されてあります。亦かの**ダビデ**が**ゴリアテ**を殺したと言ふ有名なる事件にも、何等かの矛盾が含まれて居る様に見えま



す。撒後廿一章十九節を見ますると、**ゴリアテ**を殺したる功蹟は、**ベテレヘム**の**エルハナン**に歸すべきもの丶様に記されてあるからであります。（日本譯は欽定英譯に據つたものでせうか『ゴリアテの兄弟ラミを殺せり』としてあります。併し原語は改正英譯と共に『ガテのゴリアテを殺せり』と單にあるのみであります。**ダビデ**が**ゴリアテ**を殺したとあるのに對して、困難を避けんがために、欽定英譯は代上廿〇五の本文を此處に採用したものと見えます。何れにしても此處は註釋上の一困難でありませう）然るに此書の編者は此如き不一致をすらも自らは別段意に介ぜざるもの丶如く同じ事件の別の記事に就いては讀者が其何れでも勝手に採用するに任せて平然たるものであるが如くに見えます。兎に角く本書の編輯に用ゐたる材料には極めて古いものもあつた様であります。例へば**ダビデ**が**ヨナタン**のために歌へる悲歌は、多分**ダビデ**自身の作であらうと思はれますから、隨分古いものと言はなくてはならぬのです。全部の編纂の成つたのは俘囚時

代、若しくは夫れから間も無い事であつたらうと信ぜられます。

**列王記略**も亦本來は一卷のものであつたので、今日の樣に上下二卷に分つべき特別の必要は無いものであります。**ダビデ**の時世の末期に筆を起し、王位繼承に就いての奸計をば――前に言つた同じ宮廷の歷史家の手になつた料材から來たものでありませう――先づ第一に、王上一〇から十一〇まで、之れは**ソロモン**王治世の事蹟であります。次ぎには、王上十二〇から王下十七〇まで、之れは南北分離の事から紀元前七二二年**サマリア**の滅亡の時までの事柄であります。夫れから引續き王下十八〇から廿五〇まで、**ユダ**國(卽ち南王國)の歷史、**エルサレム**の滅亡、最も貧しいものゝ外は全部俘囚の身となつた顚末が錄されてあります。列王紀略も亦勿論編纂物でありまして、其原本としては『ソロモンの行爲の書』『イスラエルの王の歷代の書』『ユダの王の歷代の書』などが擧げられてあります。其他に**エリア**、**エリシヤ**に關する二つの記錄があつた樣であります。而して此



書の編纂の傾向は、主として申命記的精神であつたらしく、**エルサレム**に神殿の築造されたる事から、地方の聖地に於ける神の禮拜など、總ては適宜に實行されて居らないとの事を、言明するのが其目的であつたのです。故に此記者の王等に對する審判は、地方の聖地を毀ちて**エルサレム**に**ヤーウエ**の禮拜を集中せしむるとの、かの申命記の主義を、忠實に實行するや否やに繫がつて居つた樣であります。初めての編纂は紀元前凡そ六百年、申命記の編纂成つて間もない事で、終りの一章は後世俘囚時代に附加されたものでありませう、併し其後に至りて絕えず改刪を加へられ、紀元前三世紀、所謂七十人譯の出來る頃には、猶ほ未だ確定したる本文が無かつた樣であります。

**歷代志略**も亦本來一卷でありまして、始めに人祖以來の系圖を載せ、**サウル**の死の時から**クロス**王(サイラス王)が、**ユダヤ**人の**バビロン**から**パレステナ**に歸りて神殿を再築すべきことを許可したる時までの事蹟を、錄して居るのであり

ます。此書の編者の取り扱へる事件は、既に多くは列王紀略に掲げられたるものでありましたので、絶えず列王紀略を座右に供しながらも、而かも甚だ異りたる見地に立ちて此書の編纂を爲したものと見えます。一言で言へば此書もまた**ユダ**の王國の歴史で――此の王國をば『背信者』と申して全く度外におきました――ありますが、夫れを祭司的觀察點から再説したと云ふにあるのです。卽ち國民の安全は祭司律を熱心に尊重するや否やに係つて存すとの主意を説明し、且つ此點を過去の事跡に照して證明すると言ふ目的を以て編輯されたる後世の産物であつたのであります。此目的を中心にして編者は多くの事實を自由に撰擇して、使用に供したのであります。同時に**ダビデ**や**ソロモン**に關する二三の物語をも加へて居ります。卽ち**ダビデ**の**ペリシテ**に赴きたること、**バテシバ**に關する事件、及び**ソロモン**の一夫多妻、偶像禮拜の事などであります。此書の編纂は、恐らくは紀元前三百年頃であつたと信ぜられます。



以士喇書、尼比米亞記は、歴代志略と同一の人の手に成つたものと想像されます。歴代志略の終の二節は、以士喇書の初の二節と同一でありまして、紀元前五三八年、國民が**クロス**王の許を得て已が國に歸り、第二の神殿を建つる事に筆を起して居るのです。以士喇書の後半は、祭司にして學者たる**エズラ**の使命を語り、八十年後の紀元前四五八年**バビロン**から歸る**ユダヤ**人の、第二班を引率したることを錄し、且つ『**イスラヘル**に法度と例規とを敎ゆる』(七〇十)ことを目的としたものであります。**エズラ**が第一人稱を以て語れる部分、七〇廿七―九〇十五に於いては、民の多くが『奇しき婦人』卽ち非**イスラエル**人と結婚するに依りての、彼が怖れの次第を述べて居ります。併し**エズラ**の熱心に感じて、斯かる惡事を行へる人にも終ひに其妻を去らしむるに至つたと言ふの記事を以て、本書を終る事になつて居ります。尼比米亞書は**ペルシヤ**の王**アルタシヤスタ**(アルタザクセス王)の酒人たりし**ネヘミヤ**が、第一人稱を以て其半を書いたものであり

ます。彼は如何にして王の許を得て**エルサレム**に歸り、町の壁を修築したかの事情を錄して居るのであります。而して八章から十章に於いて、彼が十四年後に『モウセの律法の書』卽ち疑もなく彼が**バビロン**から持ち歸つた祭司の律法を以て『イスラエルに法度と審判』とを敎ゆるの機會を得るに至りし、其仔細を物語つて居ります。人民が此法典の前に、堅く之れを實行すべきを嚴かに誓ひたる時は、卽ち**イスラエル**の宗敎は其頂點に達したる時であつたのであります。古き宗敎は去りて、新しき『猶太敎』と言ふものが此處に生れ出でたのでありました。—夫れは儀式、禮典、而して祭司が優越の權を握れる宗敎でありまして、大なる預言者等の敎訓を去ることの遠き、恰かも羅馬敎の耶蘇の敎を去つたが如きものであつたのです。以士喇、尼比米亞書も亦他の材料から編纂されたものであることは勿論でありまして、歷代志略と同年頃の紀元前三百年頃であつたらうと信ぜられます。



以士帖書は一ヶ傳奇的なものでありまして、決して正史では無いのであります。そして其一事旣に本書の內容の概略を語つて餘りあるものと思ひます。然れども傳奇的作物たる此書も、餘りに血に渴ける復讐的精神の旺盛なるに由りて、却つて私共の興味を殺ぐこと多きものであります。私共は無論之れを史實と見ず、單に假作に過ぎないものと見たいのです。また此書には一回だも神の名が記されず、正經の書としては極めて珍奇なものであります。想ふに之は**ユダヤ**人が、**バビロン**漂泊の間に學びたる、かの**ピウリム**祭の由來を說明せんために、恣まに歷史を僞りたる作物である樣に信ぜられます。**エステル**は**バビロン**の**イシタル**神、**モルデカイ**は同じ**マルタック**神の變へ名であることは、全然疑ひなき處と申してもよろしいでせう。此書の作は紀元前三百年よりは早くはなく、恐らくは紀元前百五十年、マカビース時代前後のものであらうと信ぜられて居ります。

私共は今此章を終るに際して、一事を付け加へたく思ひます。私共が**ダビデ**、**ソ**

**ロモン**の治世の盛事を讀む時、此等の聖書の記事を書ける人々の心の中に、烈々たる國民的熱情の燃えつゝ、如何に彼等は自ら世界的列强を以て任じつゝありしかを見ることが出來るのであります。併し私共が試みに地圖を展いて見るならば、彼等の此愛國心は、たゞ一場の夢現に過ぎないものであつた事を知るのであります。其隣國なる**エジプト**及び**アッスリヤ**に比較して、**イスラエル**は其盛時の頂上に在る時ですら、眞に蕞爾たる小國に過ぎなかつたのであります。常にかの二大國の間に介在して、單獨を以てしては、其何れに對しても防禦を全うすることが出來なかつたのであります。去りながら更に深く想へば、比較の標準は此處にあつたのではなかつのたです。土地の廣狹や、戰爭の勝敗ではなく、其靈的方面に於いて判斷を下す時は**エジプト**、**アッスリヤ**は、其强大遠く蕞爾たる**イスラエル**に及ばないのであります。其等强大なる帝國は、數千年の間塵の如くに存在し、**イスラエル**の獲たる帝國は却つて遠く今日にまで及んで居るのであります。**バビロン**は



人の肉體を捕虜として運び去ることは出來たのですが、**イスラエル**は捕虜となりしがために、人の靈魂を捕虜となし、其土地に培養されたる基督敎は、後の總ての文明を捕虜とする事が出來たのであります。**アッスリヤ**或は**エジプト**の古記錄に心を用ゆるものは、一人或は二人はあるでありませう。併し此少さき**イスラエル**の變遷に興味を有するものは、幾千を以て數へらるゝのであります。量に於いての大なるものが亡びつゝ、質に於いての大なるものが續き行くのであります。

# 第五章　舊約聖書

## 二　預言

### 一

舊約聖書に收められたる十六の預言書の中のどれでも、例へば其中の一章でも全く別々に考へることは不可能なことであります。故に今こゝに私の試みようと欲しまする事は、少しく利益のある仕方であらうと思ふのですが、夫れは希伯來の預言其物の現象、而かも非常に重要なる現象に就いて論じて見、同時に最も普通に誤解されて居る一事に就いて論じて見ることであります。此如くして近世に於ける舊約聖書の研究は、預言者等が**イスラエル**の宗教の發達に對して有する地位に、根本的の變化を與へたものと稱してよからうと思ふのであります。私共が預言者と云ふものゝ成し遂げたる事業を考へれば考へる程、彼等の天職の全く深



き攝理に由れるものであることを、確く信ぜざるを得ないのであります。

舊約聖書に對する傳統的見解に由る時は、預言者等の天職と及び事業とを理解することは、固より極めて容易な事でもあり、そして亦共見解に由れば、彼等の夫等には徹頭徹尾進歩開發と言ふものがなく、始も終も同じ事であつたと言ふことになり、つまり**ヘブル**の宗教には進歩と言ふものが全然無かつたと云ふ事になるのであります。語を換へて言へば、從來承認されたる思想に由る時は、**ヘブル**民族と言ふものは、遼遠たる過去から、疾く既に基督の時代に於いて見るが如き、完全な而して詳密なる律法を有して世に出でたるものとなるのであります。五書に於いて**モウセ**は、あの偉大なる法律と共に、一方には高くして且靈的なる神の觀念を――尤も之には不思議にも甚だ低級なものも混じて居つたのでありますが――他方には儀式や禮典に關する甚だ複雜繁多なる制度を國民に與へたと言ふことになるのであります。而かも此等は皆最初から一定不動なものであつたと見な

くてはならぬのであります。而してモウセが基礎を据へて且つ完成したる此建築物に、其後の幾世紀と言ふものが實は何物をも加ふることをしなかつたと言ふことになるのであります。――此如き事がイスラエルの歴史に關する眞實の事實が發見せらるゝ最近まで、何等の議論なしに基督教會に於いて認められて居つた說であつたのであります。併し實際如此き事があり得べきでありませうか。モウセの死の後數百年の間、イスラエルの宗教に何等進歩の跡なく、律法と言ふものを知つて居つたものも甚だ尠かつた狀態にあつた事は、私共は既に士師記や撒母耳書から學んだものであります。然る處所謂預言者と言ふものゝ起源と、また使命とが、以上言ふ樣な古來よりの說と全く一致することが出來るでありませうか。之私共の當面の問題であるのです。私共の知る處に據れば、預言者の始て世に出でしは最初の王朝時代でありまして、出埃及の時代から凡そ四世紀後のことで、而して彼等の出現は當時の世に新たなる旋風を捲き起したものであることは疑あ



りません。（撒前九〇九參照）併し此如く彼等の出現は稍々新しき現象ではありましたけれども、イスラエルの宗教上の事に關してまでも、必ずしも新奇な使命を有して居つた樣には見えなかつたのであります。彼等はヤーウエに就いて何等新たなる光明を齎らしたと言ふ事もなく、五書に於いて示されざる何物をも與へたと云ふ事はなかつたのです。けれども儀式や犧牲の事に關しては、彼等は寧ろ夫等の無からんことを心から希望したとあります。『エホバ言ひたまはく汝等の獻ぐるおほくの犧牲はわれに何の益あらんや我はをひつじの燔祭とこえたるけものゝ膏とにあけりわれは牡牛あるひは小羊あるひは牡山羊の血をよろこばず』（賽一〇十一）けれども若し此等の儀式や犧牲などが既に數百年の間實行せられ來つたものであり、且つ夫れはモウセ其人の承認と權威とを以て制定されたものであつたとするならば、預言者等の斯う言ふ樣な態度は如何にして有り得たでありませうか。之れ頗る判じ難い事であるのです。希伯來歴史の古來よりの說は、私共に

此如き不可解の問題を與ふるのであります。

然るにイスラエルの宗教の進化を信ずる近世の見解に由れば、此等の點は悉く適當に解決せらるゝのであります。また其解決は至極であり、道理に合ふのであります。即ち其見解に由れば、希伯來民族のカナンに移住し來りたる頃は文明の程度も甚だ低く、倫理道德の事も至つて不完全なものであつたのです。夫れは私共が士師記などに於いて見るが如きものであつたのであります。夫れが次第に文明の域に進み、宗教の觀念も漸くにして向上するに至つたのであります。かくて紀元前八世紀の頃に及びて、大なる預言者の最初の著作に出逢ふのでありまして、彼等の述ぶる倫理や靈に關する思想は、決してモウセの律法の反響ではなくて、全然新しく且高いものでありました。そして夫れが一世紀若しくは夫れ以上も發達し來りて、私共が謂ふ所の申命記と稱する紀元七世紀後半の產物たる律法の書に、恰度一致する處のものに出遭ふのであります。かの國民が儀式禮典を頻りに尊重



する樣になつたのは、預言者の主義の衰頽に傾いた頃からの事でありまして、後俘囚時代の祭司的律法主義と言ふものは、全く其頃から萠芽したものであつたのです。故に私共が舊約聖書の宗教の進化を最も良く理解しやうとするならば、かの律法が最初であつて預言者が次ぎであつたと言ふ古來の傳說の順序を、全く顚倒しなくてはならぬのであります。即ち宗教の祭司的形式たる律法の現はれ出でたのは、預言的宗教の感化の衰へた時の事であつたのです。預言者の時代が過ぎてからの律法であつたので、律法の時代を經て預言者の宗教が始まつたのでは無いのです、古來よりの說は、全く此關係を前後したものであつたのです。

預言者等の成し遂げたる事業の眞價値を判定しようとするには、此點を明白に致しておく必要があるのであります。彼等は律法の後繼者ではなくて、前驅者であつたのです。私共が彼等の宗教上の地位を正解せんとするには、此歷史上の地位を判明しておかなくてはならぬのです。從來の傳說的見解に由れば、預言者なる

ものは、たゞ**モウセ**の完成したる宗教を或る點に於いて深くし廣くしたと言ふに過ぎなかつたとなすのでありますが、併し現代の解釋に由れば實は彼等は**イスラエル**の宗教に全然革命を與へたもので、**モウセ**の始めたる國家的宗教を世界的のものとなし、**イスラエル**の宗教を基督教の祖たらしむるに至つたのは、全く彼等の功蹟であつたのであります。

かくて私共は今や最も重要なる疑問に入らうと致すのであります。即ち預言なるものゝ眞實の意義如何、預言者の名と其爲す所に由りて示せる使命は如何と言ふと之れであります。而して此疑問に正解を與へ得る樣になつたのは漸く前世紀頃からの事であつて、其間に二千年からの暗の間隙があつたと言ふのは、寧ろ驚く可き事實だと申してよからうと思ふのです。希伯來歴史の本當の過程と言ふものの分明になつたのは至極近代の事であるのでありますから、其歴史の一隅を占めて居つた預言者等の眞相の最近まで明かでなかつたと言ふも怪しむに足らないの



であります。五書の中に含まつて居る律法の各層が皆**モウセ**のものであるとの古來の說に由つたのでは、希伯來預言者の眞相を理解することは全く困難であるのです。

『預言とは何ぞや』と言ふ疑問に對する、永い間の而して普通の解答は、極めて單純で、また全く一定したる、而かも甚だ誤つたものであつたのです。即ち夫れに由れば、預言者とは神より未來に關する知識を與へられ、而して夫れを豫じめ語る人であつたと言ふのであります。希伯來の預言者等は常に其國民の歴史に於ける未來の事を先言したものであり、亦新約聖書に於いても彼等に關する見解は之れと同じで、彼等の特別なる職務は基督の降生、事業、苦難など其他の事を先言するにあつたと見做して居つたのであります。されば基督が**ナザレ**を去つて**カペナウム**に往かれたのを、**マタイ**は**イザヤ**の預言の成就したものだと申したのであります。（太四〇十二—十六）基督が比喩を語り給ふとき、夫れをしも預言の

應驗したものと思うたのであります。（太十三〇卅四、卅五）彼が驢馬に騎りて**エルサレム**に入り給ふ時、矢張り同じ事が考へられたのであります。（太廿一〇一—七）此場合には特に文字的にも應驗したものと思はれんために、態と二つの驢馬の様に申して居ります。（太廿一〇七、邦譯のこれに來りとある處、希臘原文には彼等に騎りとなつて居ります）

『預言者』とは所謂預言的職務を行ふものであることは、名詮自稱、其名の現す通りだと考へらるゝ節もあるのです。即ち希臘語の Pro と云ふ前置詞は、他にも意味はありますが、此場合には專ら『以前』の意味で、Phemi は『我語る』で、Prophetes は『未來の出來事を前言するもの』の謂ひであるのです。が併し之は通り一ぺんの說で、實は誤つて居るのであります。（一）希臘人の間にありては前言者若くは先言者には Prophetes ではなくて mantis と云ふ本來の語があるのです。彼等の間に在りては Prophetes は『神のために語る者』即ち神託を通釋する



もの丶意味であつたのです。併し（二）私共の此處に言ふ預言者は希臘人のではなくて、希伯來人のであるのです。故に私共は希伯來人の『**ナビー**』(nabi) とは、抑も何の意であるかを探究しなくてはならぬのです。然るに此語は本來他から輸入したものであるのです。即ち私共は亞拉比亞人の中に之と同じ語根を見出すのでありまして、彼等の間にありては『宣言する』の意に用ゐられてあるので、夫れが實は私共の求むる意味を表はすものであるのです。而して此意が、出七〇一、二に於いて、能く現はされて居るのであります。**モウセ**は**パロ**に對して、語るの遲きものなるを申しました時に（四〇十、參照）**ヤーウエ**之に答へて『視よ我れ汝をしてパロに於けること神の如くならしむ汝の兄弟アロンは汝の預言者となるべし汝はわが汝に命ずる所を盡く宣べし』と。即ち知る、預言者とは他人の代言者であつたのです。而して事實希伯來**ナビー**の職務の之であつた事は、預言書を能く讀める人々の明かに知る處であるのです。彼等は神の言を宣べなくてはなら

ぬとの、必至を意識したる人々であつたのであります。**アモス**の言に『ヤーウェ言語ひたまふ誰か預言せざらんや』とあります。彼等は語るものであつて、前言（先言）するものではなかつたのです。

此處に預言の進化に就いて、一言を陳べなくてはなりません。其肝要なる點に於いて極めて廣汎なる範圍を有したる、大なる勢力たりし預言は、初めから充分發達したものであつたのではないのです。其起源は甚だ低いものであつたのです。預言者と云ふ言でも、始めから善い意味を現はしたものでは無かつた樣に見えます。**ナビー**が始めて他國から希伯來に輸入された時分には、其名と業との何れとも、其名の出所に關聯して良い感想を起さしむるとが出來なかつたのです。希伯來の預言者も、其當初にありては、恰かも今日亞拉比亞に於いて見る如き回教僧と等しく、所謂宗教的狂信者を去ること餘り遠きものではなかつたのです。人が宗教的に熱狂すると、自身の思想を語るものとは見えずして、恰から**インス**



**ピレーシヨン**の器でもあるかの如くに見える事があるものであります。ですから希伯來の預言者に、時々高き行動があつたかの如く見えぬでも無いのですが、併し實は始は左程尊いものではなかつたのです。同じ希伯來語に『預言者として生活する』と言ふことは、亦『狂ふこと』と言ふ意味を有して居つた程に、實際當時の預言者には斯うした半面もあつた事は疑なき處であります。

預言者に就いて私共の最初に知るのは、**サウル**の時でありますが、當時は單に乞食僧の類に過ぎずして、夫れに高き見識はなく、**バアル**の狂氣じみたる預言者（王上十七〇）と餘り甲乙は無かつたのであります。**アモス**が預言者と呼ばれた時に、彼れは夫れを嬉ばなかつた風でありました。（七〇十四）私共は希伯來の預言者等は、此如き狀態の中から起り來つたものであることを、記憶しなくてはならぬと思ひます。然るに**バアル**の預言者なぞが何時までも劣等なものとして終つたに拘らず、希伯來の預言者に至りては、**エリヤ**なぞが疾くに宗教と道德の進歩の域に達

し、**イスラエル**の神は義の神として宣傳せられつゝあつたのであります。之は寧ろ驚くべき事實であつたのです。其本家にあつては何時までも昔の儘であつたのに、輸入先きなる希伯來にあつては迅速に偉大なる進歩を遂げたのであります。私共は此消息を理解して、觸るるものを皆金に變へたと言ふ**ミダス**の王の物語を、**イスラエル**の靈的事物に於いて實見し、頓みに驚異の目を見張るのであります。

**ナビー**は最初は語る人であつた事は、私共の既に述べた處であります。されば所謂文學上の預言と言ふものは、此口の預言よりは後になつて發達したものであります。そして國民の上に非常に大なる感化を與へながらも、文學的の產物としては何をも書き殘すことをしなかつた預言者も澤山あつたのであります。卽ち『預言者よりも大なる者』であつた**モウセ**、士師の最後の人であつた**サムエル**等を除いても、尙ほ私共は王朝時代の初期に當つて、かの**ダビデ**の罪を責めた**ナタン**、**ダビデ**が民を數へたる後に相談したりし**ガド**、**ソロモン**が偶像を拜したるに



反對すべく**エロボアム**を說破したる**アヒヤ**などを數へることが出來ます。また彼等よりは遙かに偉大なりし**テシベ人エリヤ**と言ふのがあります。彼は紀元前九世紀頃世に在りし人で、民の中に良き記憶を印象したる偉大なる人格であつたのでした。

此**エリヤ**に就いて注意すべき事が二つあります。彼は**ヤーウエ**をのみ獨り拜すべきを主張し、且つ**ヤーウエ**を以て義なる神となし、特に其倫理的性質を高唱したることであります。此地位に立ちて彼は、時の權勢家たりし**アハブ**王に立ち向ふたのでありました。**アハブ**は其妻の**イエゼベル**が**シドン**の王の女たりしより、祝意を表すと稱して**シドン**の**バアル**のために宮を建立せんとしたのでありましたが、**アハブ**の心では毫も其國民の神に逆ふ意味はなかつたのでありました。併し**エリヤ**に取つては、**ヤーウエ**の外に如何なる神をも認むることは、恐るべき不虔であつたのであります。希伯來の地にあつては、眞に許すべからざる事であつた

のであります。他の國民がバアルを拜するのは全く勝手な事でありますが、イスラエルの地にありては、斷じてイスラエルの神を拜するの聖地たらしめねばならぬとなしたのであります。ナボテの事に關してアハブを詰責したるも、矢張此倫理的見地に立ちての事でありました。

兎に角く此エリヤこそは實に彼の時代にありて、獨り聳へ立つ高塔の如き人物でありまして、人をしてイスラエル宗教史の新紀元に立つの思ひあらしむるものでした。彼が後繼者たるエリシヤに至りては固より彼と比較すべくもあらず、甚だ平凡なるものであつたのです。而して夫れ以後の預言者等に至つては、皆何等かの記錄を殘したものであります。たゞ此等の記錄の私共の聖書に於ける排列に至つては、全く秩序もなく順序もなく、一見したのみでは却つて混雜を與ふるのみであります。私共が今試みに此等を時代順に致して見ますると、概略左の如くなるであらうと思ひます。



一、アモス、ホゼア、イザヤ一〇—廿三〇、廿八〇—卅九〇、ミカ——紀元前八世紀

一、ナウム、ゼパニヤ、エレミヤ、ハバコク——紀元前七世紀

一、エゼケル、オバデヤ、イザヤ四十〇—六十六〇——紀元前六世紀、俘囚時代

一、ゼカリヤ一〇—八〇、ハガイ——紀元前六世紀、俘囚時代後

一、マラキ、ヨエル——紀元前五世紀の終に近い

一、ヨナ——紀元前五世紀或は四世紀

一、イザヤ廿四〇—廿七〇、ゼカリヤ九〇—十四〇——紀元前三世紀

一、ダニエル——紀元前二世紀

此等の書を最も良く研究し、其眞正の意味を引き出さんとするには、之れを歴史との關係に於いて彼此相照し見ることが、極めて肝要なことであるのです。私共は此點に於いて教授ジョーチ、アダムスミスに負ふ處多きを感謝しなくては

ならぬと思ひます。彼が**イザヤ**を始めとして、十二預言者に關する研究は、蓋し近世の讀者に興味と光明を與ふること少なからぬものがあるのです。私共が預言書を正確に理解する事が出來ないと言ふのは、要するに其歴史的條件を明白にすることが出來ないためであるのです。彼等は皆其時代の事情に關係を有すること多きものでありますから、夫れを思はずして其書を理解しようとするのは無理な事であるのです。亦或は以西結書の如く、本文に缺點がありまするが爲めに、本來の意味を窺ひ知ることの困難なものもあり、或は萬拉基書の如く、其人に就いて私共の何も知らぬものもあるのです。彼の名は聖書の中にはなく、夫は『我が使者』を意味するものでありますから、實は人の名で無かつたのであつたかも知れないのです。亦**アモス**、**ホゼア**等の如く、私共が夫等の書に於いて知り得るものと、實際の人格とが能く適應して居るものもあります。**イザヤ**は勿論其時代の歴史的事件と甚だ多くの關係を有して居つたもので、夫れから一世紀程後の**エレ**



**ミヤ**の場合と全く同じものであります。**エゼケル**は此等の人物に比して遙かに下るものでありますが、夫れでも其書の終の九章に於いて宮と宮の禮拜を恢復した る事件に關して、偉人なる人物たることを示したものであります。**イザヤ**書の後半は其著者不明でありますが、確かに俘囚時代の産物であつて、最も重要なる宗教思想を私共に示す處あるものであります。夫れは**ヤーウエ**の苦難を描きて、直接に又深酷に基督教に對して感化を及したものであつたのです。

預言者の殆ど總ては――併し此點は餘り斷言する譯には行かない樣に思はるゝ處もありますが――皆彼等自身の時代のために語り、亦書いたものであつたのです。彼等が直接目睹せる事件に關したものであり、彼等の周圍に於いて日夕見聞せる罪惡を叱責すると言ふのが、多くの場合に於いての題目であつたのであります。而して其一般の所見に於いて、靈的性質に於いて、道德的概念に於いて、預言者は皆同じものであつたとは言へないのです。併し其主たる點に於いては、大體

に於いて一致して居つたと申して差支なからうと思ひます。熱烈なる愛國心、**ヤーウエ**と**イスラエル**の間に存する特殊の關係が、**ヤーウエ**に對する彼等の義務と信仰とを特別なるものとならしめたと云ふこと、偶像禮拜と不義とは國民破滅の基であつて、悔いて神に歸る事のみが唯一の救濟であるとの信念、**エジプト**と**アツスリヤ**との間に介在せる此小さき國が、宗教的眞理を保護すべき特殊の任務を委托されたるものであつて、夫れが此國の尊敬であり光榮であるとの高き感情、此等に於いて預言者は皆一つのものでありました。

新約聖書の時代に於いて預言者等の書き物の能く理解されなかつたのは、預言者等の此特質——卽ち彼等は彼等自身の時代のために語り亦書いのであると云ふ——を知らなかつたゝめであります。況んや夫れより遠き後に至りては、尙更の事であつたのです。一體**ユダヤ**人等は俘囚以前の彼等自身の歷史に就いては、不思議にも餘り能くは知らなかつたのであります。かくて彼等は忘れ果てたる過



去の出來事に對する預言者等の記錄の示す處を能く解する事が出來なかつたがために、夫等をば總て遠き未來の事に關する何か分かり難い物語ででもあるかの樣に思うたのであります。而して遂に夫を自分等の現代に於いて應驗を見出すを得べきものの前言でゝもあつたかの樣に誤解し、またコジ付ける樣にさへもなつたのであります。預言者等にして若し彼等自身の時代に對して何等かの感化を表し得んと欲したならば、まだ見ぬ未來の時世に關する不可解な言辭を弄したからと言うて、何にもなるものではなかつたのでありますが、新約聖書の時代に於いては、夫れにさへも氣付く人々はなかつたのであります。悔改に關する**ヨハネ**の說教が、紀元前八世紀乃至は俘囚時代の**イスラエル**人に取つて、どうして其眞意が分かるべきでせうか。(馬拉基三〇一、可一〇二—七參照)

此如きの適例として以賽亞書七〇十四節を擧げる事が出來ませう。當時の實情は、其章の全體を讀んで見れば、何人にも直に判然することであるのです。卽ち

當時ユダの王アハズは、イスラエルの王ペカとスリヤの王レヂンとの聯合したる敵に當らなければならなかつたのであります。此時に於いてアハズ王は預言者に依りて大に鼓舞せらるゝ處があつたのですが、夫れは近き將來に此國に一人の嬰兒生れ出づべく、彼に依りて敵國は擊ち破らるゝであらうとの約束に依つてゞありました。然るに希臘譯は『若き婦人』とあるべき處を『處女』と譯したのでありました。夫れをマタイは引用して、基督の超自然的降誕の前言であつたと見做したのであります。けれども之が若しマタイが見たる如く眞に基督の降誕の預言であつたものならば、アハズの時代よりは七百年を隔てたる後の事であるのですから、當時非常なる危難に頻しておつたアハズ王と其國民とのためには、何等の鼓舞奬勵ともならなかつた筈であつたのであります。

## 二

大體の議論は先づ以上に止めて、之から預言者の書の二三に就いて、特に或る



問題を少しく述べて見ようと思ひます。

讀者は曩きに私が以賽亞の書を三つに大別した事——一は八世紀の終、一は六世紀卽ち俘囚時代、一は三世紀頃——に注意せられたでありませう。たゞ一人の著者の名を以て世に傳はりたるものを、斯く三分すると言ふのは如何なる理由に基くのでありませうか。之れに對する答は、此如き區分をなす理由は、曩きに五書の場合に於いて私共が爲したと同じ確かなる道理に基くものであるとのことを以てしなければならぬのです。アモツの子イザヤは紀元前七百四十年から七百〇一年に至るまで、卽ちスツスリヤの王センナケリブがヒゼキヤに對する遠征を放棄し、軍隊の中に起りし流行病のためにエルサレムの圍を解くに至つた時まで、エルサレムに在りて働いて居つたものであります。此物語とヒゼキヤの病氣のこと、及びメロダクーバラダンの使者の事とが、以塞亞書卅六〇—卅九〇に錄さるゝ事柄でありまして、王下十八〇十三から廿〇十九までの記事と、殆ど同一

のものとして讀むことが出來るのであります。併し私共は以塞亞書卅九章から次の章に移るに及んで、直に全く異なれる零圍氣の中にあることを感ずるのであります。即ち前者にありては、事はアツスリヤに關するもので、歴史的イザヤの時代に其勢力絶頂に達して居つた國であります。然るに今や背景は變りて、バビロン帝國の事になつて居るのであります。バビロン帝國はイザヤの時代頃から興つたものでありますが、今やペルシヤ王クロスの侵入を受けつゝあるのであります。此クロスは其名によりて言はれて居る處もありますが、亦『ヤーウエの受膏者』と稱へられて居る處もあるのです。（賽四十四〇廿八、四十五〇一）而して此處にバビロンは彼によりて敗られイスラエルの俘囚の時は去り、人民はやがて神より遣されし指導者の手に依りて、喜ばしくも彼等が祖先の地に歸らんとして居るのであります。處で此如き進歩のあつた事、イスラエルの解放者クロスの事は、正さにイザヤの時代よりは百五十年餘りも後世の事に屬するのでありますが、イ



ザヤは百五十年も以前に之を知つて預言したものであつたのでせうか。私共は寧ろ此等の章を、後世の作物と見るが至當だと思ふものであるのです。況んや文學上の形式も、神學上の思想も、全く前の章とは異つたものでありまして、決して同一の著者と見ることを得ざらしむるものがあるのであります。

然らば此等の章――善い名が無いために通常『第二イザヤ』と稱して居ります――は、如何にして其古い記錄の中に加へらるゝに至つたものでありませう。答は之れであります。古昔ユダヤ人の中にありては、預言者の書の順序は始にエレミヤ、次にエゼケル、イザヤでありまして、其次に廿七章から成れる此無名の斷片があつたものであります。夫れが寫字者かなぞの思慮なき仕業に依りて、何時の間にか前のイザヤの書の中に加へ込まれたもので、圖らず後世の混惑の種子となつたものと見えるのであります。此如き例は、預言者の他の書にも、尠からず存することと思ふのであります。昔の事でありますから、此等は敢へて多く驚く

にもあたらぬ事と思ふのであります。

以賽亞書廿四章から廿七章までは、世界の審判と**イスラエル**の贖に就いて錄す處甚だ生氣を含んで居りますが、併し內容、思想、文學上の技巧など、總て**イザヤ**のものとは見えず、俘囚時代後、恐らくは**アレキサンドル**大帝時代、若くは夫れ以後の作であらうと言ふ事に、近代の批評家は論じて居るのであります。

短篇ではありますが、由來多くの問題の存するものは**約拿書**であります。之は無論預言の書に加ふべきものでは無いのですが、而かも王下十四〇廿五に錄されてあつて、そして紀元前七百八十三年から七百四十三年まで、即ち**エロボアム二**世の治世に生存して居つた處の預言者に關係あるものと稱せられて居るのであります。併し實は私共の約拿書は此人に書かれたものではなくて、夫れよりは遙か後世のもので、恐らく紀元前五世紀乃至四世紀頃のものと信ぜられて居るのであります。處で普通の聖書の讀者は此書の眞意を解して居らるゝ事が至つて少なく、



左程に大切でない魚りの物語などに氣を多く取られて、却つて本書の重要なる部分を閑却せられて居る樣に見えるのであります。私共は曩きに路得記の場合に陳べましたる如く、此約拿書も亦目的を有する小說の類でありまして、其目的は頗る高いものであつたのです。卽ち俘囚時代以後にユダヤ敎徒の間に起りたる、彼の激烈なる排外主義に對する、此著者の心からの反對の叫びであるのであります。當時の**ユダヤ**敎は、**ヤーウエ**の恩寵はたゞ一國民にのみ限られて、他の異敎國民は皆神の怒の下にあるものであるとなし、甚だしく侮蔑して居つたのであります。而して此書は此狹隘にして固陋なる思想に反對して、**ヤーウエ**の恩寵は徧く異邦人にまで及び、悔改をなすに於いては赦しと和らぎとは、何處の民にもあるべしとなして居るのであります。本書の一節に曰く『エホバ曰ひたまひけるは汝は勞をくはへず生育ざる此の一夜に生じて一夜に亡し瓢を惜めり、まして十二萬餘り右左を辨へざる者と許多の家蓄とあるこの大なる府ニネベをわれ惜まざらんや』と。

此處に本書の精神とする處が、よく表はされてあるのであります。

神の此宏き精神を表はせる處は、正さに福音書の精神と其揆を一にせるものと申して善いのでせう。さればかの大きな魚りの物語の如きは、全く此著者の目的の肝要なる部分では無いのであります。然るに馬太傳十二章四十節に於いて、基督が『ヨナの休徴』に就いて申されてありまする處から、是非とも此物語の史實であるとを證明しなければならぬものとして、古來多くの努力が献げられて居るのであります。併し（一）基督は或る目的のために説明の資料となされたのみであること、（二）亦基督が假に之を史實かの如くに引用せられたからと言うて、何も必ずしも基督の神性や其權威を害するものとは思ふべきで無いこと、（三）馬太傳十二章四十節の記事は、**ニネベ**の人を悔改めに至らしめた**ヨナ**の説教が休徴であつたとの基督の御言葉には、何等の關係の無い挿文であると多數の學者は解して居るのであります。が何れにしても此書の眞使命とする處には、何等の影響の無



い事であらうと思ふのであります。此奇蹟を承認するとしないとは、此點には少しも差し障り無い事だと思ひます。

最後に私共は**但以理書**に移つて行かなくてはならぬのであります。抑も此書は、紀元の直ぐ前の時代にありし**ユダヤ**人には、可なり大なる感化を與へた書であります。而して此書は、紀元前六世紀俘囚時代の出來事に關係あるものだと申されて居りますが、夫れは兎に角く、實際此書の出來ましたのは、紀元前百七十年頃、**マカビース**時代であつたらうと信ぜられます。其理由とする處は、希伯來正經の第二集卽ち預言者の書の中には無かたのでありますし、亦紀元前百九十年から百七十年頃までの『**イエス**の智慧』の中には、**イザヤ**、**エレミヤ**、**エゼケル**及び其他の十二預言者を擧げて居りますが、本書の事が何も言つて無いのであります。此書の餘程後世のものであることは、之に由りて略ぼ察することが出來やうと思ひます。

夫れに亦但以理書の記者は、私共が彼が存在して居つたであらうと思ふ時代の歴史に、甚だ暗いのであります。記者は**エホヤキム**（紀元前六〇六年）の第三年に、**ネブカドネザル**（六〇四年—五六二年）に由りて、**エルサレム**が征服されたと申して居りますけれども、之が抑も大なる間違ひであるのであります。何となれば**エルサレム**は其年には、事實**ネブカドネザル**にも其他の人にも征服されたことはなかつたのであります。彼は亦**ベルシヤザル**を**カルデヤ**の最後の王（五〇卅）亦**ネブカドネザル**の子であつた（五〇二）と申して居りますが、何れも間違ひであるのです。亦**メデア人ダリヨス**が**バビロン**を獲たと（五〇卅一）申して居りますが、矢張間違ひで、實は**ペルシヤ人クロス**であつたのであります。更に**ネブカドネザル**又は**ダリヨス**の何れかゞ、彼等の民が**ユダヤ人**の神を崇むべしとの宣言を發したとありますのは（三〇廿九、六〇廿五—廿七）明かに作り話であるのです。此等は總て、著者が若しも俘囚時代の人であつたならば、到底有り得



べからざる誤謬をなしたものであることを、自ら證明して居るものと申してよろしいのです。其用語の如きに見ても、二章七—七章廿七にある**アラム**語を始め、處々に用ゐらるゝ希臘語は、皆後世のものであることを示して居ります。要するに私共が其暗示する處を能く探究して見まするに、本書は**スリヤ**の王**アンテオカス**、**エピフアヌス**（紀元前一七六—一六五）の迫害に對抗したる產物らしく、夫れに依りて此著の年代を略ぼ察知することが出來ようと思ふのです。

扨て最後に至りて私共の問題は、預言者等は全然未來を預言することがなかつたものでありませうか、と言ふ一事であります。然るに全く爾うでは無かつたのであります。彼等は寧ろ常に現在を超えて、彼方を眺めて居つたものであります。亦其國民の變遷には注意を怠らず、國民の不義を爲して止まざる時は禍いたるべきを強く信じて居つたものであります。預言者等の此穎敏なる道德性は、特に彼等に政治的洞察の力を得せしめたのであります。見る眼を持てるものには、**アツ**

スリヤの運命は既に紀元前八世紀に於いて察するを得たのであります。併し預言者等の書に於ける此種類の預言は、決して第一義のものでは無かつたのであります。希伯來の預言に特殊の意義を與へたものは『彼等は一時のものを永遠の立場から眺め、萬の物に神の支配を見、彼等と同時代の人のために神の經倫を考へ、神の聖旨に循ひて彼等を指導することを知つた』と言ふことに存したのであります。若し夫れイスラエルの宗教に與へたる彼等の感化に至つては、眞に量るべからざるものがあつたのであります。彼等の使命は無論其時代のものにあつたのですが、併し同時に萬代のためのものであつたと言ふことが出來るのでありました。蓋し彼等は『エホバの御靈によりて能力身に滿ち公義及び勇氣衷に滿ち』たるものであつたのです。（米三〇八）彼等に依りて神の感化は、人類の心情と良心とに向つて永久に其業を已むることが無いでありませう。



# 第六章　舊約聖書

## 三　詩

福音書に於いて私共に親しきものとなりたる『律法と預言者』とは、俘囚時代後に於ける猶太教が、當時に於いて宗教上の權威となしたる神聖なる記錄の二大集でありまして、其他の記錄と區別して、舊約聖書の重要なる部分をなして居つたのであります。而して『律法』と申して單に法律的記錄のみを含んで居つたと言ふのではなく、同じく『預言者』と申したとて所謂預言の部類よりは範圍の廣いものであつたのですが、兎に角く彼等の間にては『律法と預言』は希伯來の宗教思想の二大幹流を爲して居つたのであります。――聖書をたゞ見た處では、恰かも同じ流れの河の岸を彼方此方とかたみがわりに流れて居るものゝ樣にも見えるのですが、本來は全く十字形の流れであつたのであります。勿論預言者を以て律法に逆流

したものと見るは誤つた解釋であり、律法を以て預言の活きたる聲の止みたる時にのみ優越なものであつたと爲すのは、當を得た解釋では無いのであります。何れにしても此等の二大流共に甚だ有力なものであつたのですが、併し宗教の爲にイスラエルの貢献したものは之れだけではなかつたのであります。即ち希伯來の律法、希伯來の預言者に、猶ほ私共は希伯來の詩を加へて見なくてはならぬのであります。希伯來の詩は、世界の詩の寶庫の中にありて、最も崇高偉大なものであり、舊約聖書の文學と宗教との最も重要な部分であるのです。

文學の紹介者としては、詩は散文より古いものであります。私共が何れの國の古き文學を見ましても、必ず先づ其處に詩歌の存するのを見るのであります。故に私共は舊約聖書の歴史の書を見て、其處此處の長短さまゞの詩歌のあるのを見、亦夫れが希伯來文學の最古に屬するものゝ中にあるを知りて、敢へて怪しむべきことゝなさないのであります。曩にも申ました通り、士師記五章に載せられた



るデボラの歌は、紀元前十二世紀に溯るとが出來るものと思ふのです。また民數記略廿一章十七、十八に錄さるゝ井の歌も、殆ど同時代のものであらうと思はれます。他に創世記四十九章ヤコブの祝福の中にある詩の部分（紀元前千百年—九五〇年）撒後一章十九—廿九にあるヨナタンのために歌ひたるダビデの悲歌（紀元前一千年）民數記略廿三章廿四節にあるバラアムの詫宣なども同時代のものであるでせう。其他にも澤山あります。併し私共の今の問題は此種の斷片的なものに就いてゞはなく、普通に舊約聖書の詩の書と稱せられて居るもの、即ち哀歌、約百記、傳道書、箴言、雅歌、及び詩篇の夫れであります。私共は以下に於いて、興味ある此等の各書に就いて述べようとするのであります。

先づ最も短篇であるから哀歌から初めるとに致しませう。之は普通に預言者エレミヤの作であると認められて居りますが、併し希伯來の正經では全然無名の著として取扱はれて居ります。之をエレミヤの作とする傳說の由來は、多分代下卅

五〇廿五に**エレミヤ**が**ヨシヤ**王のために悲んだとあるのを、哀四〇廿に關係せしめての事であらうと思はれます。兎に角く之を最初に**エレミヤ**のものとなしたのは、かの七十人譯であります。想ふに**エレミヤ**に**エルサレム**の滅亡と俘囚の悲慘とを、目擊したる人でありましたらう。哀歌は卽ち悲痛の最も甚だしき感情を灌ぎ出したるものでありまして、その恐るべき日の時、若しくは夫れから間もない後にあつた——紀元前五八六年——第一人者の感情から出でたものであることは、毫も疑なき處であります。たゞ他の一面に於いて、此詩は果して一人の作であらうか否かを疑ふのであります。何となれば本書の第五章は詩的構成から見て、其他の部分とは大に異つて居るのを見出すからであります。形の上から見ても、一章から四章までは希伯來のイロハ順に組み立てられ、節から節に追句をなしたる、所謂離合體のものに出來て居るのであります。而して此點から見ても**エレミヤ**のものとしては極めて不似合な、餘りに精緻なものに出來過ぎて居ると思ふのです。



夫れで此詩の內容はと申せば首府の滅亡と住民の苦難の不幸とを歌へる、至つて悲慘なものであります。『劍にて死る者は饑て死る者よりも幸なりそは斯る者は田圃の產物の罄るによりて漸々におとろへゆき刺れし者の如くになればなり』（四〇九）一面**ユダ**の上に降りし運命は當然の報であつたのであります。『われらは罪ををかし我らは叛きたりなんぢ之れを赦したまはざりき』（三〇四十二）併し他の一面には、現代の禍は祖先の罪のためだとも言はれてあります。『われらの父は罪を犯して已に世にあらず我ら其罪を負ふなり』（五〇七）何れにせよ此書の末節くらひ人の哀れを誘ふ文學は、復と他には無いであらうと思はれます。

何とて我らを永く忘れ
われらを斯く久しく棄ておき給ふや
ヤーウエよ願くは我等をして汝に歸らしめ給へ
而して我等は歸るべし

我等の日を新たにして昔しの如くならしめ給へ
さりとも全く汝我等を棄て給ひしや
痛く我等を怒り居給ふや

哀歌の年代を定むるのは大した困難も無いでありませうが、**約百記**の年代を考ふる事は中々容易なことではありません。**タルムド**の傳説には、此書は**モウセ**の作だとなつて居ります。併し甚だ無理な推定であります。或は俘囚時代後に於いて、**バビロン**から**エルサレム**に歸來したる何人かの作であらうと云ふ説もあります。亦王朝時代の末期の產物だと云ふ論もあります。近代批評家は、之れを紀元前五世紀頃のものだと見做して居ります。其理由とする處は（一）俘囚時代のものたる以西結書に、**ノア**及び**ダニエル**と並びて此詩の主人公たる**ヨブ**を言ひて、義人と稱して居るのであります（十四〇十四、廿）但し**エゼケル**は此約百記に就いては知つて居らなかつたことは明白であります。夫れは罪なきものゝ苦みと夫れを



解釋すると云ふのが本書の主意とする處でありまするのに、以西結書十八章には、罪なきもの、苦しむと云ふことは絶對になき事であるとなして居るからであります。（二）**サタン**を以て人間より以上の人格者となすの記事は、此約百說を外にしてたゞ撒加利亞書三章と、代上廿一章とのみでありまして、兩方共俘囚時代後の作で俘囚時代以前の希伯來種族の間には此如き信仰は無かつたのであります。（三）約百記の用語には**アラム**語が混入して居りまして、後世の作であることを示して居るのであります。（四）亦本書には死後の生命の問題が論ぜられて居りますが、之れ亦俘囚時代以前の希伯來文學には、絶えて見出すを得ないものであるのです。

併し以士結書が約百記の主題となせるものに觸れて居らないと言ふのは必ずしも當時約百記と言ふものゝ無かつたと云ふ證據にはならず、却つて**ヨブ**と約百記とは餘りに世間に知れ渡り過ぎて居つたがためであると論ずる人もありますが、